

Grimoire



Belzébuth ～蠅の王～

流れる雲の間から、輝く満月が夜の街を睨み付ける。

強い風が吹き荒れ、鉄骨の塔に反響して不気味な呻き声をあげている。

世界一高い建造物——エッフェル塔。高度276メートルの展望台。

ここから見下ろすパリの街に、かつての華やかさは見る影もない。星のように輝いていた街灯は、空を覆う黒い渦にかき消されていた。

その正体は、蠅の大群だ。

市民（パリジャン）は蠅の軍に自由を奪われ、皆戸口を硬く閉ざすことしかできない。一步外へ出れば、全身を瞬く間に蠅に覆われ、貪り喰われてしまうだろう。

その様を想像するだけで、震えが止まらない。

「怖いのか？」

傍らに立つ小さな女の子が、私を見上げる。

「べ、別に。今までも十分怖い思いはしてきたし……」

「ほほほ、安心せい。余が側におる」

そう言って古風な語り口の少女は、冷え切った私の手を握る。伝わる温もりが、不安を和らげていく。

「……うん」

強がってみても、いつもこの子には見透かされていた。

「それに……こやつらも、のう」

彼女は後ろを見る。

展望台は大小様々な獣達で溢れかえっていた。しかし彼らは微動だにせず、赤い目を光らせ、じっと何かを待っている。

。

「……そうね」

本来なら恐れるべき彼らの存在を、私は心強く感じていた。

先頭にいた獣が、一步進んで吼える。

「陛下、ご決断を！」

「うむ！」

少女が獣達に向かい、両手を挙げる。

「皆の者、出陣じゃ！ 余に続け！」

獣達はこの時を待ち望んでいたかのようにいっせいに吼え、鳴き、叫んだ。

少女は私を見る。

「では、ゆくぞ！」

「ええ！」

私にもはや、迷いはない。

私達はどちらからともなく手を握り、そのまま展望台の柵を飛び越え——空に跳んだ。

分厚い空気の壁が、私達を吹き飛ばすように当たってくる！

それでも私は握った手を離さない。

私達は重力に沿って、地上へと——蠅がひしめく死の街へと飛び込んで行く。「きゃあああああ！」

蠅の大群が顔にぶつかってくる。

そして——落ちて行くその中心には、凱旋門ほどもありそうな巨大な蠅が待ち構えていた！

「ひっ！」

蠅は口を大きく開き、そのまま私達を飲み込み——

「い、いやあああああ！」

Passage ～パサージュ～

「ああああ……！」

私の悲鳴が、空しく響き渡る。

あれ……？

そこは暗くもなく、恐ろしくもない。

見慣れた私の寝室だった。

「……はあ……」

なんか凄まじい夢を見ていたような気がする……。

まったく、朝から疲れたわ。

「ホー、ホー」

耳元で聞き慣れた鳴き声が聞こえる。頬をくすぐる、柔らかい羽毛の感触。大きな丸い目が、私を覗き込んでいた。

「おはよう、ストラス……」

私の唯一の家族、フクロウのストラスだ。私の言葉が理解できるほど賢く、毎朝私を起こしたり、雑用を手伝ったりしてくれている。

カーテンを開くと、眩しい朝の光が入ってきて、部屋の中を照らす。

「……よし」

夢の残滓は、すっかり朝日にかき消された。いつも通りの一日を始めることにしよう。

私の家は古本屋を営んでいる。

父は魔術に詳しく、怪しい本の噂を聞いては、どんな遠い国だろうと仕入れに行く。気に入った本は手元に残し、不要なものは売り場に出すのだ。

私がある程度大きくなってからは、近所の人に私のことを任せて、頻繁に母と共に「仕入れ」に出かけるようになった。

二人が最後に旅立ったのは一週間前。その前の仕入れから帰ってきて、翌日のことだった。

……二人とももう、私のことなんてどうでもいいんだわ。

でも、私は生活には何ら困っていない。何か問題が起きても、いつも近所の人が助けてくれた。

今日もいつものように、何も無い一日だろう。一日中、店番をしながら本を読んで過ごす。

店番といっても、こんな寂れた古本屋には客なんてめったに来ないし。

古の魔導書から流行の推理小説まで、私は本さえあれば退屈しなかった。

それはそれで悪くないのだけれど、何かものたりないような……。

だけど、これ以上何かを求めるのは、贅沢というものだ。私より幼くても働いていたり、家がない子もたくさんいるのだから。

素直に今日の糧に感謝することにしよう。

固くなったパンと温かいカフェ・オ・レをテーブルに置き、私は今朝届いた新聞を開いた。

「またもパリに怪物出現！ 悪魔の化身か!?!」

いかにも大衆の興味を引きそうな大見出しと、怪奇小説に添えられるような怪物の挿絵。

最近パリのあちこちで、様々な動物が目撃されたり暴れたりしているという。

最初はブローニュの森の動物園から逃げ出したのかと思ったけど、そうではないらしい。

中には見たこともないような動物も目撃されていて、人々は怪物だの悪魔だのと噂している。

確かに、本当に悪魔なら大変なことになるけど……悪魔の召喚というものは、誰でも出来ることではない。

おそらくどこかのサーカス団が連れて来た、アフリカの珍しい動物達だろう。それが脱走して、あちこちで騒ぎになっているだけだ。

朝食を終えた私は、開店の準備を始めた。

今日は少し寝坊したせいで開店が遅れそうだけど、開店時間なんてもともとあってないようなもの。

外に出て見上げると、柔らかな光がガラス屋根を通して降り注いでいる。

いつも通りの、静かな朝。街の喧騒もここには入ってこない。

私の店は「パサージュ」と呼ばれる商店街の一角にあった。

パサージュの通路はガラスの屋根で覆われており、道はタイルで舗装されていて、雨の日でも気軽に歩くことができる。

半世紀位前までは賑わっていたけど、最近は百貨店に人が流れて、閉鎖に追い込まれる場所も後を絶たない。私が物心ついた頃には、既にこのパサージュも寂れていた。

うちは儲からなくてもそれなりに蓄えがあるから困らないけど、近所の店は苦勞しているところもあるようだ。

私は店のショーウィンドウを外側から拭く。

そのとき、急に何かが割れる音が静寂を打ち破った。

「え——？」

Malédiction ～呪い～

うちの中からじゃない。他の店だ。

私は音が聞こえた方の通路を見る。

続いて女性の叫び声と、何かをひっくり返すような、けたたましい音。

私は音源に、そっと近づいた。

あれはいつもお世話になっている、マーゴおばさんのレストランからだ。だけど、一体何が起きているのだろう。

まさか、強盗か何かに襲われてるの——!?

思わず足がすくむ。

レストランの中から、激しい音がまだ聞こえている。

我ながら情けないけど、怖くてとてもじゃないけどこれ以上近づけない。それに私が行っても、どうにもならない。

それより誰か近所の人を呼んだほうが——

「ホー？」

私について来たストラスが鳴いた。

「ストラス……どうしよう？」

フクロウに聞いても仕方ないけど……。

私が戸惑っていると、突然店から黒い影が飛び出した。

「え——!？」

それは、鳥に見えた。

しかし、普通の鳥ではない。その大きさは、小さな馬ほどもあった。

そして一瞬——黒い羽の裏から、白い人間の腕が見えたような気がして、ぞっとした。

巨大な鳥は私の反対方向に走っていき、やがて翼を広げ浮かび上がる。そしてそのまま、パサージュの出口から外へ飛んで行った。

「……な……何よあれ……」

まさかあれが、新聞を騒がしている怪物なのだろうか？

確かに普通の動物じゃなさそうだけど……。

鳥が走った後に、ひらひらと何かが舞っている。手に取って見ると、それは20フラン紙幣だった。

「鳥が……お金……？」

まさか、あの人間の手で、お金を盗んでいたとか……？

私がしばし呆然としていると、レストランから呻き声が聞こえ、我に返った。

「お、おばさん！」

私はストラスと共にレストランに飛び込む。

店内は酷い有様だった。テーブルや椅子はひっくり返し、棚も倒されて、割れた食器が床に散乱している。

そしてその奥で、おばさんがうずくまっていた。うわ言を繰り返しながら、辺りを見回し、両手を泳がせている。

私はおばさんに駆け寄り、その手を握った。

「おばさん！ マーゴおばさん！ どうしたの!? 大丈夫!？」

「あ、ああ、その声は……」

「私よ、ミシュリーヌよ！」

「ああ、ミミ……！」

おばさんは私にすぎるようにしがみついた。

「どうしたの？ 目が見えないの!？」

「ああ、何も見えないんだよ……困ったねえ……」

私はおばさんの目を見て、言葉を失った。その瞳は、何の光も映していなかったのだ。

「……ねえ、さっきの鳥は何？ あの鳥に何かされたの？」

「ああ、変な大きな鳥が店に入ってきてね……そいつを見て驚いてたら、急に周りが煙に包まれて真っ暗になってさ……」

「……！」

そんな習性を持つ動物がいるはずがない。やはり、あの鳥は……。

「ミミ、店の中はどうかちまったんだい？」

「え、ええ……荒らされてるわ。食器が割れてて危ないから、ここから動かないで」

とにかく、おばさんを治さないと！

「ストラス、『火星の2』を持ってきて！」

「ホー！」

ストラスは店を出て行き、すぐにメダルをくわえて帰ってきた。

鉄のメダルに、図形が彫られた護符——「ペンタクル」だ。

正しい素材、正しい手順をもって作成したペンタクルは、不思議な効力を持つ。

父の蔵書で私もちょっとした魔術を学んだのだ。こうしたペンタクルを常に作って備えておくのが私の日課だった。

ペンタクルをおばさんの額にそっと置き、精神を集中する。

「——言葉は命であった。命は人を照らす光であった——」

ヨハネ福音書の一節を唱えると、護符が赤い光を放って輝く。

この「火星の第2ペンタクル」は、病気や怪我を治すことができる。医者が何日もかけて治療するような症状でも、うまくいけばあっという間に完治する。

実際、近所の人をこれで助けたことは何度もあった。

もっとも私は、これで医者になるつもりも有名になるつもりもないから、親しい人にしか使ってないし、世間には口外しないように頼んである。

そもそもルルドの泉のようなマリア様の奇跡ならともかく、私がやっているのはあくまで魔術。教会に睨まれても仕方がない類のものだ。

19世紀は科学の時代と言われているけど、こういった魔術の原理は科学では解明できていない。もっとも、常人は知れない領域の話だけだ。

「あれ……？」

しかし、しばらくこうしていても、おばさんの瞳が光を取り戻す気配はない。

やがて、ペンタクルから光が消える。込められた魔力を使い果たしたのだ。こうなってしまうと、ペンタクルもただのメダルでしかない。

「……そんな……」

「ミミ……？ だめだったのかい……？」

私は愕然とした。これで治らないなんて、どうして……？

考えられるのは、これはただの病気や怪我ではなく、何らかの魔術……言ってみれば「呪い」だということだ。

これで確信したけど、あの鳥は何者かが呼び出した悪魔だろう。

「……ごめんなさい、おばさん……」

私は顔を逸らして唇を噛む。

何が魔術の心得だ。結局私はこの重要なときに、何もできなかったんだ。

「いいんだよ、ミミ……ありがとう……」

こんなときでも私を気遣うおばさんの言葉に、胸が締め付けられた。

それから私は近所の人を呼び、みんなで店内を片付け、おばさんを落ち着かせた。

そして、そのときわかったことがある。店内の金庫が破られ、中のお金が持ち去られていたのだ。

やはり、あの鳥が盗んでいったのだろう。悪魔ならそんなことをしてもおかしくない。

そのうち誰かが呼んだ医者が来て、おばさんを診てもらったが、案の定お手上げのようだった。そもそも盲目になった原因が、「鳥を見たら暗闇に包まれた」では、対処のしようもないだろう。

しばらくの間、おばさんには近所の人が付き添ってあげることになった。

……私にできることは、もう何もないのだろうか……？

とりあえず家に戻って、考えを整理してみることにした。

Évocation ～召喚～

私の知っているペンタクルには、悪魔を見つけたり、悪魔を捕まえる効力を持ったものはない。

父なら何か手を打てるかも知れないけど……当分の間は帰ってこないだろうし、当てにはできない。

私はとりあえず、あの悪魔について調べてみることにした。

幸いこの家には、父が集めてきた様々な魔導書（グリモワール）がある。最近本屋で買った占い用の本から、中世に書かれたと思われる古ぼけた本まで様々。

有名なものは、「ソロモン王の大きな鍵」や「ソロモン王の小さな鍵」。

古代イスラエルの王ソロモンは、72柱の悪魔を自在に使役し、神殿や王宮を作らせたという。また、様々な魔術を記したグリモワールを書き残している。

私のペンタクル魔術も、「大きな鍵」から学んだものだ。

一方「小さな鍵」には、72柱の悪魔の特徴とその召喚方法が記されている。

「これって……！」

その中にはあの鳥悪魔と姿や能力が一致する悪魔もいた。

序列44番の悪魔——「シャックス」。

間違いない、この悪魔だ。誰かが呼び出したんだ。

だけど……悪魔の召喚なんて、誰でもできることではない。

本人自体の魔力はもちろん、魔力を持ったグリモワールも必要だ。

今では書店でも出回っていて、誰でも簡単にグリモワールを手にとることができるけど、普通はそこに書いてある儀式を行ったところで、悪魔を呼び出せるわけじゃない。

印刷されたグリモワールには何の魔力もないし、悪魔を呼び出せるほどの魔力を持つ人もめったにいない。

グリモワールはそんな数少ない魔術師が書き残したもののだけど、実際にそこに記された魔術を実行できる人はほとんどいないらしい。

なのに様々な悪魔がパリに呼び出されているとしたら……よほどの大魔術師の仕業か。

ともあれ、私だってまったくの素人じゃない。

ここにある古ぼけた「ソロモン王の小さな鍵」も、200年は前のものだ。

召喚が成功する条件はそれなりに揃っている。

「……よし」

悪魔は悪魔をもって制すべきだ。

うまく呼び出すことができれば、あのシャックスをどうにかしてもらえる。

だけど、私は召喚魔術を行ったことがない。そもそも危険なので、父から禁止されていた。未熟な魔術師は、呼び出された悪魔に殺されてしまうこともあるからだ。

私はなるべく召喚者に従順な悪魔を選ぶことにした。

呼び出せることが確認できるだけでも構わない。危なかったら帰ってもらえばいいのだ。

私は慎重に考えて呼び出す悪魔を決めると、さっそく召喚儀式の準備を始めた。

一階から階段を降りると、パサージュの家々を繋いでいる地下通路に出る。

その突き当りの扉を開くと——そこから先は、果てしない闇の空間が広がっている。

パリの地下を覆う、広大な地下道（カリエール）の入り口だ。

何も見えない、何も聞こえない、暗黒の深淵。

その分集中する儀式などには最適なので、私はいつもここで、ペンタクルに魔力を込める儀式などを行っている。

そんなに奥まで行かなければ、すぐに帰って来れるし。

燭台に火を灯し、地面に魔法円を描くための布を敷く。

円の外側の4隅に五芒星を、内側に4つの六芒星を。少し離れた東側に、円より小さめの三角形を描く。どちらにも神聖な文字やヘブライ語の文字を、規定通りの色で記しておく。

形式に沿うほど魔術の成功率は上がるけど、今は急いでいるのでかなり手順は省いている。

悪魔にはそれぞれ印章があり、命令するときにはその悪魔の印章を見せつけると、屈服させることができるらしい。

本来ならば指定された金属で作るべきなんだけど、とりあえずは「小さな鍵」の印章が描かれているページを使えばいいだろう。

儀式の際に着ているローブに着替え、帽子を被る。

邪魔が入らないように店は閉店し、誰かが訪問しても追い返すように、ストラスに見張らせておいた。ここまで来る人もいないだろうけど……。

昼間といえどこの地下道は真っ暗で、湿った冷たい空気が立ち込めている。

辺りを照らすのは、燭台の揺れる炎のみ。

私は魔法円の内側に立ち、「小さな鍵」を開き、そこに記された呪文を読み上げる。



「我は、汝、精霊マルコシアスと呼び起こさん。至高の名にかけて、我、汝に命ず。あらゆるものの造り主、その下にあらゆる生が跪く方の名にかけて、万物の主の威光にかけて！ いと高き方の似姿によって生まれし、我が命に応じよ。神によって生まれ、神の意思を為す我が命に従い、現れよ」

震えるような低い声を意識しながら、言葉を紡ぐ。

「アドニー エル エルオーヒーム エーハイエー イーハイエー アーシャアー エーハイエー ツアバオト エルオーン テトラグラマトン シャダイ」

正面の三角形に意識を集中し、叫ぶ。

「いと高き、万能の主にかけて、汝、マルコシアスよ、然るべき姿で、如何なる悪臭も音響も無く、速やかに現れよ！」

私の声だけが、周りの石壁に反響して響いた。

「……………」

私はそのまま、しばらくの間魔法円を見つめたまま待った。

しかし……何も起こらない。

私は緊張を解くように、ため息を吐いた。

「やっぱり、そんな簡単にはいかないか……」

私は諦めて帽子を脱ごうとしたが、その時。

三角形から眩しい光の柱が立ち昇った。

「え——!？」

そしてその光の中から、何かの影が浮かび上がる。

「う、うそ!？」

やがて光の柱が消えると——そこには一匹の動物がいた。

ただしその姿は、どんな新しい生物の図鑑にも載っていないだろう。

白い鳥の翼と、蛇の尾を持つ狼。一般的に伝わっている悪魔のような、恐怖をあおるような姿ではなく、むしろ天馬のような美しさを感じさせる。

悪魔は翼を畳んだまま、私を見つめる。そして口を開いた。

「……私を呼んだのは、貴女ですか？」

「え……？」

私は思わず啞然としてしまう。その声は、澄んだ女性の声だったのだ。

確かに悪魔は喋るものだと知っていたけど……まさか牝だったなんて。

「え、ええ、そうよ。私はミシュリーヌ・ジェルマン。あなたが序列35番の悪魔、『マルコシアス』ね？」

しかし、あまりうろたえてはいけない。悪魔に対しては対等以上の姿勢で望まなければ、騙されたり逆らわれたりしてしまう。

「私の願いを聞いて欲しいの！ あの——」

「ガルルルル……！」

「きゃ！」

突然彼女は獣の唸り声をあげ、翼を広げて私を威嚇した。

「さては貴女ですね……？ 我が同胞たちを、己のくだらぬ欲望のために呼び出していったのは……」

「え、え!? ち、ちが——」

なんで怒っているの？ この悪魔は、召喚者に対しては従順だって書いてあったのに！

彼女は勝手に三角形から前足を出し、こちらに向かってきた。

悪魔は魔方陣から出てしまうと、召喚者の言うことを聞かなくなる。

「こ、こら！ か、勝手にそこから出ないで……」

私はグリモワールに描かれた、マルコシアスの印章を見せ付けた。

私の魔力とグリモワールの魔力が反応し、開かれたページが光り輝く。

……だが、マルコシアスはまったく動じない。

「その程度で私を抑える気ですか。まったく、かつては偉大なる王に仕えしこの身が、貴女のような未熟な魔術師に呼ばれるとは……」

彼女はやれやれ、とばかりに首を振った。

「貴女が私を使役するというのなら、まずは私を御して、その力を示してみなさい」

「な、なんですって!？」

そんな話、聞いたことない——！

「それができなければ……あなたはここで死ぬだけです、ミシュリーヌ！」

彼女は咆哮と共に大きく口を開き、私に飛びかかってきた！

「きゃあっ！」

私は為す術もなく地面に倒され、前足で押さえつけられた。

大きく開かれた真っ暗な口の中。その深淵から、光がゆらめきながらこみ上げてくる。

炎だ！

「ひ、ひっ——」

私は思わず目を瞑る。

そのとき——

「そこまでじゃ、マルコシアス！」

場違いな幼い声が、地下道に響き渡った。

「!? ま、まさか……そのお声は！」

マルコシアスはすぐに私から飛び降り、振り返る。

暗闇の中に、いつのまにか何羽もの白い小鳥が舞っていた。

その中心に、小さな影が立っている。

「ほっほっほっ、余の顔を見忘れたか？」

地下室の中に、無邪気な笑い声が響き渡る。

それは、声の通り幼い女の子だった。

小さい王冠を頭に乗せ、袖が足元まである、ゆったりした服を身にまとっている。髪は黒く、私と比べると肌の色は濃い。アラビア人を思わせる顔立ちをしていた。

「な……」

何なの、この子は。

その衣装も口調も、オペラから飛び出してきたようだ。

どこからか地下道に迷い込んで来たのだろうか？

女の子は袖から丸い壺を取り出すと、小鳥達はその中に帰っていった。

マルコシアスは女の子に走り寄り、まじまじと見つめている。

「わ……忘れるはずもございませぬ……！ この日をどんなに待ちわびたことか……貴女に再び見（まみ）える日を……！」

前足で目を拭う。感涙しているのだろうか……？

そして両翼を広げ、歓喜の雄叫びを上げた。

「我が主よ……偉大なる『ソロモン王』よ！」

………はい？

今のは、私の聞き間違えだろうか。

女の子はマルコシアスの頭を、飼犬のようになでる。

「ほほほ、元気そうで重畳じゃ、マルコシアス侯爵。またよろしく頼むぞ？」

「は、なんなりと！ この身は我が主、ソロモン王のためにあります！」

「うむうむ、頼りになる奴じゃ。それに比べて他の連中ときたら、余が寝とる間に皆どこぞに行きよって」

彼女は不満そうに頬を膨らませる。

………ソロモン王？

この女の子が？

いやいや、それはありえないでしょう。あのソロモン王が、こんな女の子のわけがない。

そもそも、女だったら女王と伝えられているはずじゃ——

「およ？ およよ？」

彼女は私に気付いたようで、袖を引きずって走り寄ってきた。

「おお、おおお……！」

そして何やら感嘆しながらわたしを上から下に眺めると、天を仰いで両腕を広げ、高らかに詠い出した。

「我が妹、我が花嫁よ、貴女は私の心を奪った。

貴女はただひと目で、貴女の首飾のひと玉で、私の心を奪った。

我が愛する者よ、貴女はことごとく美しく、少しの傷もない。

我が花嫁よ、貴女の唇は甘露を滴らせ、貴女の舌の下には、蜜と乳とがある。

貴女の衣の香りはレバノンの香りのようだ……！」

この詩は確か……聖書の「雅歌」だったかな？ なぜ今それを詠うのかわからないけど。

そして彼女は改めて私を見つめ、

「そちは誰じゃ？ 誰じゃ？」

なぜか知らないけど、息を弾ませて目を輝かせている。

「え、え？ わ、私は……」

「その娘は軽はずみにも、王の兵である私を呼び出した不届き者です」

「マルコシアスッ！」

女の子はマルコシアスを一喝した。

「余はこの女子（おなご）に訊いているのじゃ！ 犬は黙っとれッ！」

「はっ！ し、失礼しました！」

マルコシアスは焦って平伏した。

さっきまで恐ろしい狼だったのに、今は哀れな子犬に見える。

「で、そちはこの街の魔術師か？ 名をなんという？」

私に向き直り、再び期待に満ちた眼差しを向ける。表情がころころ変わる子だ。

「え、えっと……私はミシュリーヌよ。魔術師ってほどでもないけど……」

「ほうほう、ミシュリーヌと申すのか。雅な響きじゃのう……」

うっとり頬を赤らめて、私を見つめている。

私はなんか恥ずかしくなって、とっさに質問した。

「それで、そういうあなたは誰なの？」

マルコシアスを従えたあたり、ただものじゃないのは確かだけど……。

「ほっほっほっ、聞いて驚け！」

女の子は平たい胸を張って言った。

「我こそは、その名を後世まで轟かせし、魔術王ソロモンなりい！」

「……………」

ああ、わかった。答えをはぐらかそうとしてるのね。魔術師は正体を隠すものだから、当然といえば当然だけど。

ソロモンといえば、魔術師ならば誰もが憧れる存在。彼にあやかっただけで、その格好をしているのだろうか。

「もう、そんなウソにはひっかからないわよ。本当のことを言いなさい」

相手が年下のせい、ようやく私も落ち着いて、強気な態度に出れた。

「な、何？ 余の言うことが信じられぬのか？」

女の子は迫真の演技でたじろぐ。

「ミシュリーヌ！ それ以上我が主への侮辱は許しませんよ！」

マルコシアスが女の子の足元に来て、私に向かって吠える。

そういえば、さっきからのマルコシアスの態度はとても演技には見えない。

「え……？ ま、まさか本当に、この女の子がソロモン王だっていうの……!?!」

啞然としている私の頭に、バイロンの言葉がよぎった。

曰く、「事実は小説より奇なり」――。

Salomon ～魔術王～

「それで？ そちはなぜマルコシアスと呼んだのじゃ？」

「え？」

私が固まっていると、女の子——自称ソロモンが私に聞いてきた。

「え、ええ、それなんだけど……」

彼女に対して疑問に思うことは山ほどあるけど、今は目的を優先しよう。

私は、マーゴおばさんがシャックスと思われる悪魔に呪われてしまったこと、私のペンタクルも効かなかったことを話した。

「なるほど、それで困っておるのか」

「シャックスならやりかねません。彼は度々人間の召喚に応じては、馬や金品を手に入れていました」

さすが同じソロモンの悪魔。同僚の動向については詳しいらしい。

「ふむ、底意地の悪さは相変わらずか……。ここは奴を捕まえて、呪いを解かせる他にないであろうな」

「やっぱり……。じゃあ、シャックスを捕まえて！ 元はあなたの配下だったんでしょ？ あなたなら簡単に——」

「うーむ、そうじゃのう……。かつては大勢おった余の軍勢も、今ではなんとも心許ないしのう」

ソロモンは腕を組んで考える。

「かつて余の配下だった者は、すべからく余の元に帰るべきじゃ……。しかし」

私の顔を見て、何やら薄笑いを浮かべた。

「な、何よ……？」

「ただでというわけにはいかんのう～」

「ま、まさか……お金でも欲しいの？」

確かに助けてもらうのなら、こちらからも何か対価を支払わないといけない。

でも……家にもそれなりに蓄えはあるけど、さすがに王様が喜ぶような金銀財宝は……。

「ほほほ、庶民にそんなものは期待せ～ぬ」

ソロモンは小さい身体を、私にすり寄せてきた。

「余が望むものは唯一つ！」

指輪をはめた人差し指を、私の眼前に突きつける。

「ミシュリーヌよ……」

そして、私を真顔で見つめながら、言った。

「余のものになれ！」

「………は？」

後ろでマルコシアスがため息をつく。

「余のもの」って……ああ、そういうことね。

一瞬、意味がわからなかったけど……つまり、他の悪魔たちと同じように配下になれ、ということか。

「それって、どういう仕事するの？」

「ほほほ、仕事か。なあに、そちの人生を縛ることはせぬ。ただ、しばらくそちの家に厄介になるぞ」

なんだ、それだけのことか。いくらなんでも、小さい女の子一人を食べさせるくらいの余裕はある。

「まあ、いいわよ？ そのくらいなら」

「ひょほーう！ よしよし、その言葉、忘れるでないぞ！」

ソロモンは小躍りして喜んだ。

うーん、部下が増えるのがそんなに嬉しいことなんだろうか？ 私なんて悪魔たちに比べたら、大して役に立たないと思うけど……。

「さて、いい加減この洞窟も飽いたぞ。出口はどっちじゃ？」

「え、ええ……あの扉を開ければ、家の地下に出るわ」

「ほほう、どれどれ……」

ソロモンは扉に向かっていった。私も撤収準備をしなきゃ。

「本当に良かったのですか？」

振り返ると、マルコシアスが私を見上げていた。

「え？ 何が？」

「貴女の人生ですからとやかくは言いませんが……もう少し考えてからでも……」

そんな真剣に考えることだろうか？

「いいのよ。こうしてる間にも、おばさんは不安でしょうがないと思うから」

「……ミシュリーヌ……。どうやら、貴女の器を見誤っていたようです」

マルコシアスは何やら改まり、私に跪く。

「この戦い、私も尽力致しましょう。これからはなんなりとご命令を！」

「あ、ありがとう……」

どうしてこんなに褒められるのかわからないけど……まあ、悪い気はしないわね。

「お〜い！ この扉はどうやって開けるのじゃ〜!？」

ソロモンが扉を闇雲に叩いている。壊される前に向かったほうがよさそうだ。

「おおお、こうなっておるのか〜」

ソロモンはパサージュの通路に出て、物珍しそうに辺りを見回した。

この珍客を誰かに見られやしないかと思ったけど、相変わらずパサージュには誰もいなかった。

「ここは一体、どういうところなのじゃ？ 店がくっついて並んでおるようじゃが、道の上に屋根がついておるぞ？」

「ええ、パサージュっていう、一種の商店街よ」

「ほ〜う。それにしては、人を見かけないのう。今日はどこも休みなのか？」

「いいえ。まあ、昔は賑わっていたらしいけど……時代の流れには逆らえないってことね。百貨店（グラン・マガザン）ができてからは、そっちに客が流れてしまったの」

「ほほほ、では余がこの界限に活気を戻してしんぜようか？ これでも商売は得意なのじゃが」

「交易で国を繁栄させるのとは、わけが違うと思うんだけど……」

彼女は常識を知らなさそうだし、その魔術で何をしでかすかわからない恐ろしさがある。

できるだけ目立たないように、騒ぎにならないように事件を解決したいところだ。

「それより、どうやってシャックスを捕まえるつもりなの？」

「ふふ、案ずるな。この魔術王ソロモンに抜かりはないわ」

ソロモンはそう言って、袖から何かを出した。

「壺……？」

それはさっきも見た、丸い真鍮製の壺だった。表面に呪文のような文字が刻まれている。

「さよう。余が72柱の悪魔を封じておいた壺じゃ」

そして彼女は右手の壺の前に構えたまま、左手を高く上げ、叫んだ。

「出でよ！ 序列69番の悪魔——デカラピア！」

その左手の指輪から、印章を象った光が回りながら宙に広がる。

次の瞬間、右手の壺からボンッと煙が広がった。

「きゃ——!？」

そしてその煙の中から、回転している何かが浮かび上がる。

これはなんだろう？ 五芒星の形をしているけど……？

「こやつはデカラピア侯爵じゃ。こう見えても生きておる」

「ふ、不思議ね……」

ヒトデに似ているけど、それにしては無機質な感じがする。

「デカラピア、シャックスの居場所を探るのじゃ！」

ソロモンが命じると、デカラピアは回転を止める。そして身体の中央にある、口のような部分が開く。

そこから何かが飛び出した。

「え!？」

鳥だ。小さく白い鳥が、デカラビアの口から羽ばたいていった。

続いて二羽目、三羽目と、次々に鳥が飛び出していく。

地下道でソロモンと一緒にいたのは、この小鳥達だったのだろう。

デカラビアの小さい体の中に、どうやってこんなに鳥が入っているのか、まったくわからない。

「まるで手品だわ……」

「ほほほ、デカラビアは鳥の姿をした使い魔を操ることができるのじゃ」

ということは、この鳥はデカラビアの魔力で作られているのかもしれない。

鳥達は部屋の窓からそれぞれ様々な方角の空へと飛んで行く。

「あの鳥らはデカラビアの目となり……必ずや彼奴の姿を見つけてくれよう」

「なるほどね……」

「後は、報告を待つばかりじゃ。ところで、余は喉が乾いたぞ。酒を持ってきてたもれ」

「あ、あのねえ……」

これから大切な仕事をしてもらうのに、酔っ払ってもらっては困る。

ここはカフェ・オ・レで我慢してもらおう。

フクロウのストラスも加えて、私たちはテーブルを囲む。

「ほほお、これは酒ではないようじゃが、甘くて美味じゃのお～」

ソロモンは両手でカップを掴み、私が入れたカフェ・オ・レを飲んでいた。

マルコシアスはソロモンの足元に、おとなしくお座りしている。

「……う～ん……」

いつも一人で過ごしている部屋に、こうして見知らぬ来客が座っているのは、実に奇妙な光景だった。

まさに、マッド・ティーパーティー状態だ。頭が痛い。

「それにしても、ストラスまでおったとはのう」

ソロモンはストラスの頭を撫でる。

「え、この子を知ってるの？」

ストラスは父が旅行の土産に買って来たはずだけど……？

「うむ、我が配下の一人にして序列36番の悪魔、ストラス王子じゃ。のう？」

「ホー」

ストラスは嬉しそうに首を体にうずめる。

「そ、そんな……この子も悪魔だっていうの？」

ただのフクロウだと思ってたのに！ どうりで賢いはずだわ。

こんな身近なところに、既にソロモンの悪魔がいたなんて。

でも、魔術に詳しい父のことだ。ただのフクロウではなくてもおかしくはない。

というか、どこの「王子」なんだろう？ 悪魔の肩書きにどんな意味があるのか、謎だ。

「……まあ、悪魔達の反応からして、あなたがあのソロモン王だってことはわかったけど」

私は彼女を、じっと見る。

「三千年前から、ずっと生きてるっていうの？」

「ほほ、まさか。天寿を全うした余の魂は死後、ある悪魔の元で復活のための力を蓄えるため、眠りについておった。ついこの間目覚めるまでな」

「ふ、復活って……」

さすがは魔術王、考えることが違う。

「でもその悪魔って……あなたの配下の？」

「いや……まあ、三千年前からの腐れ縁じゃ……」

ソロモンはなぜか目を逸らし、顔をしかめた。

旧約聖書によるとソロモン王は晩年、異教の神……つまり悪魔を崇拜していたらしいけど、関係があるのだろうか？

「しかし彼奴の仕事が遅いせいで、復活が予想より遥かに遅れてしもうてのう。おかげで壺の中に閉じ込めておいた悪

魔共は脱走するわ、余の魔術が人々の手に渡るわ.....まったく由々しき事態じゃ。ほほほ」

そう言う割には、ソロモンはこの状況を楽しんでいるかのようだ。

「でも、なんであのとき地下道に？」

「うむ.....彼奴はこの国の大使をしているらしくてのう、この街に住んでおるのじゃ」

「た、大使.....!？」

もう何があっても驚かないが、一体パリはどうなってしまっているのだろう。

「余は自由を求めて彼奴の館の地下から脱走し、あの地下道に入った。印章の光を明かりにして進んでおったが、迷ったのでデカラビアに道を探らせたところ、マルコシアスを見つけたというわけじゃ」

「ふうん.....まあだいたいのはわかったわ」

とりあえず納得していると、一羽の白い小鳥がテーブルに止まり、チュンと鳴いた。

「お、見つかったようじゃな」

悪魔の大使も気になるけど、今はシャックスを追う方が先決だろう。

窓から次々と小鳥が入ってきて、デカラビアの口の中に帰還していく。

「それで、彼奴はどこにおったのじゃ？」

小鳥の一羽が、ソロモンの前でピイピイと鳴いた。

「ほう、なるほどのう」

「って、あなた鳥と話せるの!？」

ソロモンは左手の指輪を見せた。

「この指輪には、あらゆる生き物の言葉を理解する力があるのじゃ」

「それじゃあ、私とフランス語で話せるのも.....？」

「ほほほ、わざわざ余がこの国の言葉を一から学ぶとでも思うたか？」

ソロモンは手を腰に当てて笑った。

「威張ることじゃないでしょ.....」

確かに、普通の外国人ならうまくフランス語をしゃべっても、訛りは抜けないはず。彼女は最初から流暢にフランス語を喋っていた。

「それで、シャックスはどこに？」

「うむ、ここから北西の方角にある宮殿に入っていったそうじゃ」

「え.....宮殿.....!？」

「心当たりはあるかの？ ここからだいたい2000キュビトラしいのじゃが」

「それって何メートルよ.....」

古代の単位で言われてもピンと来ないんですけど。

「そもそも、そっちに宮殿なんてあったかしら？」

引きこもりがちとはいえ、私だって一応パリジェンヌだ。パリの地形は大まかには頭に入ってるつもりだけど.....。

念のため、私はパリの地図を広げてみる。

「ほうほう、真ん中を川が流れておるのか」

「ええ、セーヌ川よ。うちのパサージュは.....ここね」

私は指を指して示す。パリのほぼ中心に位置するルーブル美術館から、北に進んだところだ。

「.....でも、やっぱりそっちには宮殿なんてないわ。エリゼ宮殿は西だし、リュクサンブール宮殿は南、ブルボン宮殿は南西だもの」

ソロモンはデカラビアに向き直り、

「このうつけがッ！ 何を見ておるのじゃ。もう一度探して来い！」

この子って悪魔には容赦ないわね.....。

それにしても.....宮殿か.....。

「あ、待って！」

私はようやく、その意味に気づいた。

「そもそも宮殿かどうかなんて、見た目じゃわからないわ。パリには宮殿のように大きくて美しい建物がたくさんある

もの」

自慢じゃないけど。

「それは困ったのう。おい、何かその宮殿の特徴はないのか？」

鳥はソロモンにピーチクと鳴いて何かを伝える。

「ふむふむ。どうやら上から中が覗けるらしいのう」

「それって……このパサージュみたく、ガラスの屋根ってことかしら？」

私は地図に乗せた指を、北東の方角になぞりながら考える。オペラ座は宮殿のように壮麗だけど、上から中は覗けないはず。

「——あ！」

だけどその奥には、条件を揃えた建物が確かにあった。

ここにあの悪魔が入ったというのなら……状況は極めてまずい。

「ミシュリーヌよ、そこには何があるのじゃ？」

「……百貨店（グラン・マガザン）よ……！」

Cabriolet ～馬車～

「では行くぞ、皆の者！」

ソロモンは悪魔たちの前で壺を出し、指輪をはめた左手を挙げた。

デカラビアとマルコシアスはボンッと煙に包まれる。そして、その煙ごと壺の中に吸い込まれた。

「これで、いつでもどこでも悪魔を呼び出せるというわけじゃ」

「まるでアラジンの魔法のランプだわ」

そういえば、ソロモンはアラビアでも精霊（ジン）を操る魔術師として伝えられているんだっけ。

「ホー」

ストラスが自己主張するように鳴いた。

「なんじゃ？ そちも行きたいのか？」

「ストラスはいいのよ、ここで留守番してて」

家の留守番は昔からストラスの役目だった。うちには貴重なグリモワールもあるわけだし、見張り役は必須なのだ。

父は初めからグリモワールの守護者として、悪魔のストラスを呼び出したのだろう。

仕入れから帰ってきたら色々問い詰めたいところだ。

私はソロモンを連れて、パサージュの外へ出た。

「おお、賑やかじゃのう！」

大通り（ブルヴァール）の真ん中を、多くの馬車が行き交っている。

人々は新緑の並木道に沿って歩いている。

「男も女も、皆帽子を被っておるのう。流行っておるのか？」

「流行りっていうより、身だしなみとして当然なのよ」

かく言う私も、きちんと帽子を被ってきた。

ソロモンは小さい王冠を頭に乘せているけど、バカみたいで恥ずかしい。

「しかし雨も降ってないのに、なんであの女たちは傘を差しておるのじゃ？ そ、それになんじゃあれは！ 人が車輪に乗っておるぞ！」

ソロモンが指を差したのは、自転車に乗っている人たちだ。

「不思議じゃのう、なんで倒れないんじゃ？ 一体どんな魔術を——」

「もう！ そんなことはいいから、さっさと行くわよ！」

通行人が物珍しそうな目で私たちを見ている。なにしろソロモンは紀元前そのままの、現実味のない服を着ているのだ

。

今日のところは仕方ないとしても……明日からは帽子も被せて、ちゃんと現代に相応しい格好をしてもらおう。

と、ソロモンが急に立ち止まった。

「ちょっと、今度は何？」

「み、ミシュリーヌよ……」

ソロモンは、何か愕然としたような顔をしている。

「え……？」

彼女のこんな顔を見るのは初めてだ。さすがに気になる。

「ま、まさか……このまま歩いていくわけではあるまいな……？」

「え？ 当たり前でしょう、歩いていける距離だもの」

「い、いやじゃ……いやじゃいやじゃ！」

ソロモンは痙攣を起こし、その場にしゃがみこんでしまった。

「ちょ、ちょっと——」

「よ、余は王じゃ！ 王様じゃ！ 王様がなんでちんたら歩かねばならんのじゃ～！」

「な……なんですって……？」

呆れた。ソロモンはただ、歩くのが嫌で駄々をこねているだけだ。

「せ、せめてあの馬車に乗せぬか！ これでは敵と戦う前に、余が力尽きてしまうぞ！」

ソロモンは震える指で、行き交う馬車を差す。

「あ……あなたねえ……」

なんてわがままなんだろう！ この先、この子のお守りをしていくことを考えると気が重い。

私が頭を抱えていると、上から声がかかった。

「あ！ あんたはまさか……ソロモン王じゃねえですかい!？」

振り向くと、一頭立て二輪馬車が停まっていた。やけに大きい身体の御者が、青白い馬の手綱を握っている。

「おお、そちは……マルティム侯爵か!？」

ソロモンが立ち上がると、御者は降りて一礼した。

「へい！ いや～まさか王が復活なさったとは知りやせんでしたよ！」

「ほほほ、目覚めたのはついこの間じゃがのう」

見た目は人間の男性と変わらないけど、ソロモンの知り合いということは……。

「こんなところで何をしているのじゃ？」

「それが、この街の人間に呼び出されて、そいつの御者をしてるんでさあ」

「おい、マルティム！ 何を止まってるんだ！ 急がねばオペラに間に合わないではないか！」

見ると、座席に太った身なりのいい男性が乗っていた。

彼がマルティムを呼び出したの……？

「なかなか羽振りがいい奴なんですよ。けど、さすがに我が王が帰ってきたとなっちゃあ——」

「おいマルティム！ 聞いているのか！」

マルティムは男性の襟首を掴むと、ぽいっと地面に投げ捨てた。

「ぶわっ！ な、何をやる貴様あ！」

「序列18番の悪魔、マルティム。再び王の脚となりやしょう！」

マルティムは男性の非難を無視して、ソロモンに一礼する。

座っているときは見えなかったけど、彼には蛇のような尾が生えていた。

私は思わず誰かが見ていないか、見回してしまう。

「うむ、よろしく頼むぞ！」

ソロモンは満足そうに頷いた。

こんなふうには悪魔に慕われているところをみると、わがままでもそれなりに人望はあったようだ。

「早速だが、余とこの娘を乗せてたもれ」

「ははっ、相変わらず好きですなあ！」

「ほほほ、新たなる伝説の始まりじゃ！」

「……？」

二人の会話の意味がわからないけど、とりあえずこれでソロモンも納得だろう。

私たちが車に乗せると、蒼白い馬は一声いななき、風を切って駆け出した。

「ほほほ、やはりこうでなくてはのう！」

「ま、待て貴様ら——ぎゃあ、馬の糞がああ！」

マルティムに捨てられた男性の絶叫も、すぐに遠くなり聞こえなくなった。

ちょっと哀れな気もするけど、今は非常事態だし、仕方ないよね。

……それにしても……。

シャックスといいマルティムといい、パリに現れている悪魔たちは、みんなソロモンの悪魔なのだろうか……？

Diable ～悪魔～

「これかあ、確かに大きいのう。窓もいっぱい宮殿のようじゃ！」

外から見る百貨店は、いつもと変わらぬ威容を誇っている。

だけど入り口前は、少し人だかりができていた。中で何かが起きている証拠だ。

私たちはマルティムの馬車から降り、人だかりを掻き分けて中に入る。

「こ、これって……！」

「ち……彼奴め、手当たり次第というわけか」

私はぞっとした。中はいつも騒がしいけど、今日の騒ぎは意味が違う。

客も店員も、みんなうずくまって嘆いている。みんな、おばさんと同じ症状だ。目が見えなくなっているのだ。

後から入ってきた人達は、呪われた人々を介抱しようとしたり、身の危険を感じて引き返したりしている。

この騒ぎじゃ警察が駆けつけるのも時間の問題だろう。けどたとえ警官でも、呪いをかけられたら無力化されてしまう。

配下の扱いに慣れたソロモンなら、なんとかしてくれるはずだ。

私たちはとりあえず店内の奥に進む。

あちこちに呪いをかけられた人たちが呻いている。ここまで大きな事件になってしまうなんて……。

「マルコシアス！」

ソロモンは左手を掲げた。指輪からマルコシアスの印章が広がって光る。

壺から煙が噴き出し、マルコシアスが呼び出された。

「ちょ、ちょっと……！」

「なんじゃ？ 何か問題でもあるのかの？」

「あ……」

人前で悪魔を堂々と召喚するのはどうかと思ったけど、そもそも誰も見えていないようだった。

「な、なんでもないわ」

「心配するな、戦は余とマルコシアスに任せておけ。そちは自分の身を守ることに徹してたもれ」

「そ、そうね……」

悲しいけどソロモンの言う通り、私は戦うことはできない。ペンタクル魔術は基本的に争いごとには向いていないのだ。

「ときにマルコシアス、余に考えがあるのじゃが……」

ソロモンは屈んで、何事かをマルコシアスに耳打ちした。

「……承知しました。ですが、どうかお気をつけて……」

二人は何を話したのだろうか？

それを聞く前に、ソロモンは上を見上げて感嘆した。

「おおお～、ここから空が見えるぞ！」

百貨店の中央ホールは吹き抜けになっていて、重なる階層が確認できる。大きく開いた格子状のガラス屋根から、さんと光が降り注いでいる。

鉄骨とガラス。使っている素材はパサージュと同じだけど、建物の規模が桁違いだ。

「しかしこうも広いと、探すのも一苦労じゃのう」

ソロモンはまた壺を取り出した。

「デカラビア！」

壺から煙と共に、デカラビアが姿を現す。

「シャックスを探してまいれ！」

さっきと同じように、デカラビアは次々と小鳥を出し始める。

吹き抜けからあらゆる階層へ……百貨店のあちこちへ、大勢の小鳥が飛んで行く。

それは現実味が無いゆえに、どこか幻想的な光景だった。

まもなく一羽の小鳥が帰ってきて、ソロモンに鳴いて告げる。

「最上階だそうじゃ！」

「そこの階段から行きましょう！」

私が指し示した先には、両側の手すりを鉄の花で彩られた階段があった。

「……う、うむ！」

ソロモンは何やら躊躇した様子だったが、私の後をついて階段を登った。

最上階の3階に着き、辺りを見渡す。この階の人たちも、既に呪われてしまっているようだ。

ソロモンが肩で息をしている。

「ぜえぜえ……ろ、老体に堪えるわい……」

「子供のくせに何言ってるのよ」

ソロモンの実年齢も気になるけど、そんなことは後回しだ。

「って、あれ——！」

奥の方に、大きな黒い鳥の姿が見える。

間違いなくシャックスだけど……目の前の男性と何か話しているようだ。

「何じゃ、あの男は？ 何故無事でいる？」

私たちはこっそり近づく。

何やら怒った様子で、シャックスに話しかけている男性。この場に似つかわしくない、みすばらしい格好で、帽子も被っていない。

しかし彼はその手に、グリモワールを持っていた！

「あの人がシャックスを呼び出したの……!？」

ということは、彼がその手にしているのは「ソロモン王の小さな鍵」だろうか。

彼らは口論に夢中で、私たちに気付いていない。

「話がちがうじゃないか！ 必要以上は呪いをかけないって言っただろ!？」

「はてさて、そんなこと約束しましたかな？」

気が立っている男性に対して、シャックスはしわがれた声で平然と答えている。

「少しの間、周りの目を眩ませるだけで良かったんだよ！ こんなに大勢の目を封じてどうするんだ！ この百貨店の品物、全部持っていけるわけないだろ！ 騒ぎが大きくなっただけじゃないか！」

「ククク、それはあなたの盗みの腕の問題でしょう」

「だいたい、俺は銀行を襲えって言っただろ！」

「申し訳ありません。こちらのほうが面白そうだったので、つい」

「ちっ！ もういい！」

彼はその手のグリモワールを開き、シャックスに開いて見せた。

「我、汝に命ず！ 悪魔シャックスよ、今すぐ全員の呪いを解け！」

シャックスの印章が載っているページを見せ付けているのだろう。

「ケケケケ！」

しかし、シャックスは甲高い声で笑うだけだ。

「な、なんでだ!? なんで俺の命令を聞かない!？」

「残念ですが、あなたの役目は私を呼び出した時点で終わっているのですよ。さようなら」

シャックスは羽の下から、白い人間の腕を出す。

そして、目の前の男性を指差した。

途端に彼の頭が紫色の煙に包まれる。

「う、うわあああ!? な、なんだ!? 目が、目がああああ！」

男性はその場で跪き、呻き始めた。

「あれが、シャックスの呪い……！」

おばさんも、あれで……！

「ミシュリーヌ、そちはここで待っておれ」

「え？ で、でも……」

「そちに万一のことがあったら、余が困るからのう」

ソロモンは私を見て、不敵に微笑んだ。

そして一人、シャックスのもとへ歩いていく。

なんか心配だけど、シャックスも元はソロモンの配下だったわけだし、おとなしく従うはずだ。

「そこまでじゃ、シャックス！」

ソロモンは堂々とシャックスの前に出た。

私はショーケースに隠れて様子を伺う。

「これはこれは、ソロモン閣下。お目覚めになられたのですか」

「久しいのう、シャックス侯爵。どうやら好き勝手に暴れておるようじゃが？」

「カカカカ。何しろ今や自由の身ですからねえ。こうして人間が苦しんでいる様を見るのは、実に愉快ですよ」

「……っ！」

私は唇を噛む。

シャックスは今日会ったどの悪魔よりも、悪魔らしい性格をしていた。

「なぜこのような魔術師でもない人間に、私を召喚できたのか理解しかねますが……この際、楽しませてもらっているというわけです」

「ほーう、そうかそうか。じゃが余がこうして蘇った以上、そちもまた余の下に戻ってもらうぞ」

「カカカ、これはご冗談を！ あんな窮屈な暮らしはもう真っ平ですよ。私は二度と貴女に仕える気はありません」

どうやらシャックスは、ソロモンにおとなしく従うつもりはないようだ。

私ははらはらしながら成り行きを見守る。

ソロモンはシャックスを睨み、声を張り上げた。

「余に逆らうというのか！ シャックスよ、今すぐ全ての呪いを解くのじゃ！ さもなくば痛い目を見るぞ」

ソロモンは左手の指輪を、シャックスに見せ付けた。指輪からシャックスの印章が輝いて宙に浮かび上がる。

「カカツ、そんなカビの生えた契約など、もはや何の意味も成しませんよ！」

しかしシャックスは印章にも怯まず、そのままソロモンを指差した。

ソロモンの頭を、紫色の煙が包み込む！

「うぐっ……！」

「ソロモン！」

ソロモンはあっさり呪いをかけられ、その場に倒れてしまった。

あ、あの子は何をしているの!?

大見得を切って出て行った割には、余りにもあっけない。

「カカカカカ！ もはや誰にも私を止められないのです！ しかし念のため、貴女の目は潰させていただきますよう」

シャックスは飛び上がり、長い口ばしをソロモンに向ける！

い、いけない！

私は思わずソロモンの命令を無視して走り出す。

その時――

「ガアアアア！」

咆哮と共に、黒い影がシャックスに飛び掛った！

「ギャア！」

それは、さっきから姿が見えなかったマルコシアスだった。

彼女はそのままシャックスを床に叩き付け、動きを封じる。

「そこまでです、シャックス！」

「マ、マルコシアス……おのれ……！」

シャックスはなんとか指を動かし、マルコシアスに呪いをかける。

マルコシアスの頭が紫色の煙に包まれる。

しかし、彼女は動じない。

「無駄ですよ。あなたにもわかっているはずでしょう。あなたの呪いは、人間にしか効かないと」

マルコシアスが口を大きく開く。

「や、やめろオオ！」

「我が主の慈悲を蔑ろにした罰を受けよ、シャックス！」

マルコシアスはその場でシャックスの顔面に、炎を吐きかけた！

「ギヤアアア！」

シャックスは飛び立とうとするが、マルコシアスに脚を抑えられ、その場で燃える頭を振って悶えるしかない。聞くに堪えない絶叫の中、焦げ臭い匂いが漂ってくる。

悪者とはいえ、なんかやりすぎな気もするけど……。これが悪魔のやり方なのだろうか。

「ふう、だから忠告したのじゃ。痛い目を見るとな」

ソロモンは立ち上がり、服の埃を払った。どうやらもう目は元に戻っているらしい。

シャックスが生命の危機に陥り、自分がかけた呪いを維持できなくなったのだろう。

「さて、最後にもう一度聞いておこうかのう？ このまま焼き鳥になるか、再び余の下で働くか。好きなほうを選ぶが良い」

それは問いというよりは、明らかに脅しだった。

「は、働く！ 働きますウ！ だ、だから助けてエエエエ！」

「うむ、良い心掛けじゃ。シャックスよ、この指輪に誓え！ 再び余と契約すると！」

「ち、誓うウウウ！」

ソロモンの指輪から、シャックスの印章が広がって輝く。

「よし、契約成立じゃ！」

ソロモンは壺を出した。

シャックスは煙に包まれ、そのままソロモンの壺の中に吸い込まれた。

.....

「ふう、なんとかなったのう」

ソロモンが額の汗を拭い、息をつく。どうやら終わったみたいだ。

「相変わらず見事な策でした、我が主」

マルコシアスがソロモンに跪く。

「ほほほ、そちは正面から突っ込んでしまう癖があるからのう。翼があるとはいえ、飛ぶのは鳥である彼奴の方が上手（うわて）じゃ。初めからそちの姿を見せて、逃げられでもしたら追いつかぬ」

「しかしだからといって、自らの身を危険に晒してまで困にするとは.....」

「ほっほっほっ、王たるもの、これくらい肝が据わってはいなくてはのう」

ソロモンは豪快に笑った。確かに、大した度胸だと言わざるを得ない。

「ソロモン！ 大丈夫!？」

私はソロモンのもとに駆けつける。見た感じ、どこも怪我していないようだ。

「うむ、彼奴は見事に引っかかりおったからのう」

「まったく、見ていてひやひやしたわよ.....」

「おお、心配してくれたのか？ さっそく余の虜というわけじゃな。これは今宵が楽しみじゃ、ふふふ」

「な、何よそれ.....？」

ソロモンは何やら不気味に含み笑いしている。

「それより、他の人の呪いももう解けたのかしら？」

私は辺りを見回す。

「あ.....」

少し離れたところに、召喚者の男性がその場にしゃがみこんだまま震えていた。

「シャ.....シャックスが.....な、なんなんだお前らは.....!？」

「余か？ 余は魔術王ソロモン。シャックスの本来の主じゃ」

ソロモンはマルコシアスと共に男性に近づく。

「ひ、ひいっ.....！ お、俺をどうする気だ.....!？」

「どうする気じゃ、ミシュリーヌよ？」

「え!？」

そこで私にふるの？

「そ、そうね……やっぱり、きちんとおばさんの店から盗んだお金を返してもらいたいけど……その前に、気になることがあるの」

私は床に落ちている、彼が持っていたグリモワールを拾った。

「これを見せてもらえる？」

「あ、ああ……」

男性は疲れきった様子で、もはや抵抗する気もないようだ。

私はグリモワールをぱらぱらとめくって確認する。大分汚れてるけど経年によるものではない。紙も印刷も新しいし、「1889年発行」とある。

「これは……ただの市販されている『ソロモン王の小さな鍵』よ。最近印刷されたものだし、この本自体には何の力もないはずだわ」

「では、こやつが魔術に通じておるといのか？」

ソロモンは男性を見やる。

「ち、ちがう！ お、俺はもともと魔術とか悪魔なんて信じてなかったんだよ。ただ、ゴミ捨て場でその本を拾って、面白半分で儀式の真似してみたら、ほんとに出てきちまって……。金が欲しいかって誘ってきたから、つい……。最初は人通りが少ないところで、試しに何件か襲ってみて……」

「っ……！」

おばさんの店はそのとき目を付けられて、被害にあったんだ。

この男がどんな言い訳をしようと、私は許す気にはならないだろう。

「うまくいきそうだから、今度は銀行を襲おうとしたんだ。だけどあいつ、俺の命令を無視してこんなとこに……」

「ふむ、まあシャックスにそそのかされたとはいえ、そちが悪事を働いたのにはちがいないのう。グリモワールはただのきっかけじゃ。つまりそちは、元々いつ罪を犯してもおかしくないような人間というわけじゃ。マルコシアス、こやつを火刑に処せ！」

「御意！」

マルコシアスは男性に近づいた。

「ひ、ひいっ!？」

「待って、ソロモン」

私は呆れつつ、とりあえず止めに入る。

この子ったら、いつのまにか自分で裁こうとしてるじゃないの。

「確かにこの人は許せないけど……この人をどうするかは、警察に任せるべきだわ」

「余の裁きが不服というのか？」

ソロモンは指をくわえて、首を傾げる。

「ここはあなたの国じゃないわ、現代のフランスなのよ？ あなたはこの国の王様でもなんでもないんだから、勝手に人を裁いていいわけないでしょう？」

「おっと、そうであったのう。すっかり忘れておったわ、ほほほ」

ソロモンはのん気に笑い出した。

まったく、冗談のつもりだったのだろうか？ 本気だったとしたら、かなりの暴君だ。

「もっとも、この人の供述が信じてもらえるかどうか……。正直、こんな事件警察もお手上げだと思っわ」

だけど、実際にシャックスに呪われて被害にあった人も大勢いるし。

新聞はどのように報道するのだろうか……？

やがて吹き抜けの下のほうから、ざわめきが聞こえてきた。店内に入った警官たちが、従業員や客に事情徴収を始めたのだ。

ソロモンにマルコシアスを壺に戻させ、私たちは適当に被害にあった客のふりをしてやり過ごした。

ソロモンが変な格好してるから、言い訳するのが大変だったけど……。

男性が警官に捕縛されるのを見届けた後、ようやく百貨店を出ることができた。

駐車場で待っていたマルティムの馬車に乗って、私たちは家路についた。

外はすっかり暗くなり、街灯が並木道を照らしている。

「……でも、あれほど多くの方が被害を受けたんだもの。あの百貨店はもう悪評が立って、潰れてしまうかもしれないわね……」

「ほほほ、それなら余が買い取って宮殿にしてやろう」

「もう、そんなお金あるわけないでしょ」

昔は王様だったかもしれないけど、今ではただの居候に過ぎないんだから。

「案ずるな。こちらに客足が戻ってくるのじゃろ？」

「あいにく、百貨店は何箇所もあるのよ」

おいしい目を見るのは他の百貨店だけだろう。

「……それにしても……一体どういうことなのかしら……」

「ん？ なにがじゃ？」

「あんな簡単に一般人が、それも印刷された魔力もないグリモワールなんかで悪魔を呼び出せるはずがないのに……」

「確かに、言われてみれば妙じゃのう」

ソロモンは席の後ろで手綱を握るマルティムに聞いた。

「のうマルティム、そちを呼んだあの太った男は魔術師であったのか？」

「ははっ、まさか！ あいつはただの没落貴族で、体面のために自家用の馬車が欲しかっただけでさあ」

「奴もグリモワールを持っておったか？」

「持ってやしたけど、何の力も感じやせんでした。なんであつしを呼び出せたんでしょうねえ」

どうやらマルティムの場合も、シャックスと同様だったようだ。

「グリモワールというものは昔から出回っているものだけど……実際に悪魔が出てきて大騒ぎなんてことはなかったわ。なんで最近になって……？」

「ふむ。どうやらこの街で、何かが起こっているようじゃが……今日のところはひとまず、帰って休むとしようかの。あんなに階段を登ったので、余は疲れてもうた」

ソロモンは欠伸をした。

私は思わず苦笑する。

「もう、悪魔の召喚よりそっちのほうが疲れるっていうの？」

なんだかんだいって、こちらに来て早々働いてもらったわけだし、早く休ませてあげよう。

Amour ～愛～

パサージュに帰ると、家の前でおばさんが立って待っていた。

「ミミ！」

「おばさん！」

私は走り寄る。

「もう大丈夫なの？」

「ああ、さっき急に光が戻ってねえ。清々しい気分だよ」

「良かった……。あ、安心して。犯人はもう逮捕されたから、盗まれたお金はすぐに戻ってくると思うわ」

「もう！ そんなことはいいんだよ」

おばさんは私を抱きしめた。

「あ……」

「それよりあたしは、ミミがどこかに出かけたって聞いて、何か無茶するんじゃないかって……」

「……おばさん……」

「ジェルマンさんから預かってるってのももちろんだけどさ……それ以上に、あんたはあたしにとって、家族同然なんだから。あんまり心配かけるんじゃないよ。……わかったかい？」

「……はい……ごめん……なさい……」

おばさんの温かい腕に包まれて、目頭が熱くなる。

事件を解決したのはソロモンだし、結局私はおばさんに何もしてあげられなかったけど。おばさんはそんな私でも、優しく受け止めてくれた。

「ほらほら、泣かないの。今晚はミミの好きなポトフ作ってあげるからさ！」

その日の夕食はおばさんのレストランで、ソロモンと一緒にご馳走になった。

夜も更け、私たちは寝巻きに着替えた。

ソロモンにはとりあえず私が昔着ていたものをあげたけど、普段着も含めて一通り揃える必要があるだろう。

「ほうほう、これをそちが着ていたのじゃな……」

何やら袖の匂いをくくん嗅いでいる。さすがにかび臭かったかしら？

ソロモンには母の部屋で寝てもらうことにした。

「こんなところで眠れというのか？ 狭苦しい部屋じゃのう～」

「狭苦しくて悪かったわねっ。これでもこのベッドは大人用なのよ。十分でしょう？」

「やれやれ、早急に我が宮殿を再建しなければならぬのう。そのためには彼奴……いや彼奴が先か……」

何やらぶつぶつ言っているけど、もうさっさと寝かしつけてしまおう。

「ところで、ミミとはそちのことか？ ミシュリーヌ」

「え？ ええ、私の愛称だけど」

ソロモンは私の腕に、両腕を絡ませてきた。

「ほほほ、ならば余もミミと呼んで当然というわけじゃな」

そう言って猫のような仕草で、頬を腕にこすりつける。

私に懐いてるのだろうか？

「……あのねえ、愛称って言うのは親しくなった人だけが呼んでいいものなの。あなたとは今日会ったばかりで——」

「何を言うか。余とそちの仲以上に、深い仲があるか！」

そう言うと、ソロモンは急に私をベッドに押し倒した。

「きゃっ！」

彼女は私に覆い被さり、両手で私を押さえている。

こ、この子、どこにこんな力が……!?

「ほっほっほっ、そちの願いは叶えてやった。約束は守ってもらうぞ、ミミ！」

「え？ 約束って……ああ、あなたの配下になるってこと？」



「ん？ 何を勘違いしておるのじゃ？ 余のものになると誓ったではないか」

「え、ええ……でもそれって——」

「ええい、じらすのも大概にせい！ んむっ！」

いきなりソロモンは、その唇を私の唇に吸い付けた。

「……っ！」

こ、この子……何して……まさか、そういう趣味……!?

私はなんとか両腕を動かし、彼女の口を引き剥がす。

「ぶはっ！ な、なに……を……」

「ふふふふ……ミミよ、そちは今日から余の妻じゃ！」

「は、はあっ!？」

あ、あれってそういう意味で……!?

だからマルコシアスは、私に同情してたの……!?

「余はかつて千人の妻を娶ったのじゃ。そちは記念すべき1001人目にしてやろう！」

「な、何言ってるのよ、あなた女でしょう!？」

私はなんとかソロモンをどけようとするけど、彼女は異常な力で私の腕を押さえている……！

ソロモンは目を血走らせ、息を荒くしながら言った。

「ほほほ、なぜ余が女王ではなく王と名乗っていたと思う？ 女王が女を集めるなど、体面上都合が悪かったからじゃ！」

「そ、そんな……」

「もっとも、女王と記した歴史書があったとしても、千人の妻を娶ったなどという記述を見れば、後世の者が書き換え

て当然！ ほほほ、歴史などいい加減なものじゃのう！」

「あ、あ……」

つ、つまり何なの？ 私をどうする気なの!?

「さてさて、御託はここまでじゃ！ じゅ・て～むっ！」

ソロモンは私の服を無理やり脱がし始めた。

「ちょ、ちょっと！ や、やめ——」

そして、露になったところに、その舌を、

「ひ、ひゃあ——」

……それから先のことは、頭が真っ白になって覚えていない。

唯一つ、これだけは言える。

私はもう、彼女の妻になるしかなくなったのだと……。

後記

初めまして、またはこんにちは。よもぎ史歌です。

この度は「グリモワール」をお読みいただき、ありがとうございます。

後書きで本編の補講をするのは言い訳がましいので、本編では語られることのない制作裏話などを。

何年も前から「ソロモン72柱」は素材として使ってみたいと考えていました。悪魔ひとりひとりの外見や能力、印章まで設定されてあるなんて、なんとも中二心を刺激するではありませんか。

最初は2004年くらいに企画した、女子中学生がケータイで72柱を呼び出すという漫画でした。

これは下描きのあたりで挫折しました。なんかやたらと説教臭くなってしまったのです。

2010年に考えたのは、1930年代のプラハを舞台にした漫画でした。

72柱とロボットが融合しているという設定でしたが、どうも無理やりな感じが否めませんでした。

ソロモンも元は今年考えていた別企画のヒロインでした。女子高生魔術師（ミミの前身）と共に世界中を旅しながらオカルト事件を解決していくというものです。これはアイデアとしては面白いのですが、雰囲気統一するのが好きな私にはいまいち書き難い。

改めてソロモンの使う72柱を調べてるうちに「地獄の辞典」に行き着き、19世紀フランスで書かれたこの魅力的な本を読むうち、いっそのこと素材を悪魔に限定して、舞台を19世紀のパリに固定してしまおうと思いたったわけです。

72柱の設定については様々な解説本を参考にしていますが、本によって記述がちがいます（これは72柱に限ったことではないのですが）。大別すると「ソロモン王の小さな鍵」の記述と、「地獄の辞典」に違いがあります。プランシーは彼らに新たな外見や設定を与えてしまっているからです。しかしこの作品はそもそも「地獄の辞典」のリスペクトから始まっているので、否定する理由はありません。フクロウのストラスも、巨大な蠅のベルゼブも、便器に腰掛けるベルフェゴールもこの本で初めて描かれた姿ですが、それらは後々の彼らのイメージに繋がっていると言えるでしょう。

悪魔の名前の表記も色々ありますが、これは「地獄の辞典」のものを採用するわけではなく、適当に自分が気に入ったものを選んでいきます。

しかし彼らの名前を眺めているとどうしても「タクティクスオウガ」を思い出してしまいますね。登場人物の大部分が悪魔の名前と気づいたのはつい最近になってからでした。

時代設定については正確には決めていませんが、とりあえずエッフェル塔は建っていてほしかったので、1889年以降ということになります。1900年になると万博に合わせてまた色々建てられるのですが、世紀末（デカダンス）のイメージにも憧れるので迷うところです。

パリは大好きな街なので前から舞台にしたいと思っていたのですが、フランスはいまいちオカルトネタが乏しく、いい企画が作れませんでした。今回ソロモンと合わせる事でようやく形にできました。

一度取材に行ってみたくもありますが、実際に行くと幻滅するのも怖いので、必ずしも現地に行く必要はないと思います。今の世の中は本やネットで資料は十分集まりますので。

意外と後書きも長々と書けるものですね。

それでは、また次回作でお会いしましょう。

ストラスをもふもふしたい よもぎ史歌

Pentacle ～聖別～

パリの地下に縦横無尽に広がる地下道（カリエール）。その底なしの暗闇の中に、私はいた。揺れる燭台の火が、辺りをおぼろげに照らす。足元に広がる、布に描かれた魔法円。その中心には鉛のメダルが置かれている。薫香の神秘的な香りが漂う中、私は魔導書（グリモワール）「ソロモン王の大きな鍵」を開き、厳かに呪文を唱え始めた。

「おお、最も力強きアドナイよ、最も猛きエルよ、最も聖なるアグラよ、義なるアレフ、タウ、始まりにして終わりなる方よ。万象を御身の知恵の内に成したもう方よ、御身、アブラハムを御身が誠実なる使徒と成したもう方よ、天の星として御身が司る、全ての種があらゆる地で祝福されるよう、約束された方よ、御身、燃える柴の内に、モーセにその姿を見せられた方よ、紅海を足を濡らす事なく渡られた方よ、御身、シナイ山にて法を与えられた方よ、御身、魂と体の為に、御身の使徒ソロモンに偉大なる慈悲を以て聖なる護符（ペンタクル）を与えられた方よ、心より、御身に身を低くせん。御身、いと聖なるアドナイ、その聖なる王国と帝国、その王権が終わりなきものによりてペンタクルを御身の力によりて聖別し、あらゆる精霊に対する事かなう、徳と力を与えたまえ……」

私は静かに瞳を閉じ、両手を広げて天を仰ぐ。土星を表す黒い光が私の頭上からゆっくりと身体に流れ込み、満たしていく。想起するのは山のように揺るがない、何事にも動じない強固な意思。土星の力が身体中に満たされたことを確認すると、私は魔法円の中心に置かれたペンタクルに、そっと両手をかざす。球状の黒い光がペンタクルを包み込み、やがてペンタクルの中に収束していく……。

「……ふう」

これでこのメダルは、魔力を持ったペンタクルとして機能する。

メダルに七惑星の力を封じ込めるこの「聖別」という作業は、私の日課だった。

たとえあの奇妙な客人と一緒に生活することになっても……いや、だからこそより必要になってくるはずだ。これから私は否応なく、彼女によって事件に巻き込まれていけようから。

「う～！ うぬ～！」

噂をすれば、鍵をかけた地下道の扉を叩く音が聞こえてきた。

「はいはい、今開けるわよ……」

扉を開けたとたん、寝巻き姿の彼女は私の胸に飛び込んできた。

「きゃ——」

「おう、じゅてーむ！ てっきり逃げられたかと思ったぞ！」

「う、うちの蔵書を置いて逃げるわけないでしょう……」

ソロモンは辺りを見回す。

「ほう、ここでペンタクルを作っておったのか」

「ええ。ここなら邪魔も入らないし」

「ほう、それは良いことを聞いたぞ。つまりここで余がそちに何をしても、誰にも止められないというわけじゃな！」

ソロモンは口をタコみたくして迫ってきたが、あえなく私の手に押さえつけられた。

「む、むぐぐっ」

「はいはい、冗談は朝くらい食べてからにきなさい……」

この子が家に来てから、もう4日。この手の悪戯には、もう慣れてしまった。

机の上には、聖別が済んでいつでも使えるペンタクルが並んでいる。そこに、先程聖別したばかりのペンタクルを置く。

「それにしても、毎日熱心なことじゃな。今日作ったのはこれか？」

ソロモンはそれを手に取って眺めた。

「これはどんな効果なのじゃ？」

「それは『土星の第7ペンタクル』。軽い地震を起こすものよ。あまり使う機会が考えられないけど……今日はそれくらいしか作れそうなものがなかったから」

ペンタクルは惑星の種類によって、聖別に適した時間が細かく決められているのだ。

「……って、なんで見てわからないの？ この本あなたが書いたんでしょ？」

私はペンタクルの作製方法が記されている「ソロモン王の大きな鍵」を広げて見せた。

14～15世紀に書かれたこのグリモワールは、ローマ教皇から禁書にされたことでかえって人気が出てしまったという。魔術の基本的な約束事も記されているので、私のような駆け出し魔術師にとっては必要不可欠なグリモワールと言える。

彼女は本をぱらぱらとめくる。

「正確には書記に書かせたものじゃが……こんなものいちいち覚えておらんしおう、実際あまり使わなかったのじゃ。ペンタクルは余にしか作れなかったが、いちいち作るのが大儀でう。ほほほ」

「まあ、確かに一回使えばまた聖別しなきゃいけないし、面倒ではあるけれど……私にはこれしかできないのよ」

「うむ、そちに任せるとしよう。余は悪魔共を使役するための力を残して置かねばならんからう」

「確かに、それが合理的ね」

「なぜかは知らぬが、この街で余の配下であった悪魔共が次々と呼び出されておるのは確かなようじゃ。見つけ次第捕らえて、再び余の王国を再建せねばの！」

「あなたの野望はともかく……それが結果的にパリを悪魔による混乱から救うことになるわね」

人々は市販のグリモワール「ソロモン王の小さな鍵」によって悪魔を呼び出しているようだ。私はシャックスの事件の翌日、本を回収してくれるよう警察に頼んだが、やはり聞き入れてもらえなかった。まだ証拠が不十分だし、なによりそんな話誰も信じない。今のところ私たちだけの手でなんとかするしかないだろう。

「もちろん、そちも協力してくれるな？ 余の妻として……！」

ソロモンはいやらしい目で私を眺めた。あの夜のことが思い返され、私の頬は一気に熱くなる。

「あ、あくまで保護者としてよっ!? あなたに街中で好き勝手に暴れられたら困るのよ、私の責任になるから——」

「ほほほ、照れんでもよい」

「～！」

いけない、朝から手玉に取られてしまっている。

「ホー」

ちょうど助け舟を出すように、ストラスが今朝の新聞を足に掴んで飛んできてくれた。

「ありがとう、ストラス！」

これで話題を変えられる。私は新聞を受け取ると、一面の大見出しをわざとらしく読み上げる。

「なにになに？ 『ブローニュの森の怪！ うごめく木々と幽霊楽団』……ですって」

自分で読みながら思わず眉をひそめた。

お化けの木が人を襲っていて、そのとなりで幽霊達が演奏をしているという、滑稽な挿絵が添えられている。

「おうおう、さっそく今日も何かが起きているようじゃな。聞かせてたもれ」

ソロモンはひじ掛け椅子に深く腰を下ろし、横柄な態度で命じた。かつてはこんなふうにも、玉座で配下の報告を聞いていたんだろうか。

「はいはい……。ええと……ブローニュの森で真夜中に、風もないのに木の枝が動いたり、どこからともなく楽団の演奏が聞こえたりするという怪現象が起きている……らしいわ」

「ふむ……悪魔の中には、木の姿をした者はおらぬはずじゃ。何かの見間違いであろう。演奏が得意な輩は何匹かおったが、姿がわからぬ限りは何とも言えぬのう」

「今のところ、なんらかの被害は出ていないようだし。最近の悪魔事件に便乗したデマかも知れないわね」

新聞はこういうところがなんとも厄介だ。事件が国民に伝えられるのはいいけど、どこからか発生した根も葉もない噂まで取り上げて、結果的に読んでもらうほうからは何が事実で何が嘘かわからなくなってしまう。

特に私達のように新聞の情報から行動の指針を立てている場合、下手をすると偽の情報のために無駄な探索をする羽目になる。

「だが、何かが引っかかるのう。ううぬ……」

ソロモンは腕を組んで何かを思い出そうとしている。

「とりあえず、森へ行ってみる？」

「いや！ それより、そろそろ余の服ができたころではないか!？」

「ああ、そういえばそうね」

ソロモンが来た日の翌日、彼女の服を作るためブティックへ連れて行ったのだった。ソロモンはあれこれと無茶な注文をしたが、無事出来上がっただろうか？

Champs-Élysées ～追跡～

ストラスに留守を任せ、私達はパサーージュの入り口で待っていたマルティムの馬車に乗り込んだ。彼の馬車に乗る度に大通りで召喚するのはさすがに問題なので、彼には普段は自由にさせて、必要なときにデカラビアの鳥で呼びつけるようにしてあった。

行きつけのブティックはシャンゼリゼ通りにある。「楽園の野」を意味するこの通りは、比較的新しい繁華街だと言える。美しいマロニエの並木道を、人々は気持ち良さそうに散歩している。通りを登った先には、巨大な門がそびえている。

「それにしても馬鹿でっかい門じゃの～。巨人でもくぐるのか？」

ソロモンの素直な感想に、思わず吹き出す。

「ちがうわよ……あれはエトワール凱旋門とって、100年前の皇帝ナポレオンの戦勝を称えた記念碑なの」

「ほお、偉大な王であったのか？」

「ええ、ヨーロッパの大半を手中にしたときもあったのよ」

「なるほどのう、余と並ぶ英雄王か。是非会って話をしてみたいものじゃのう。今はどこにおるのじゃ？」

「とっくに亡くなられてるってば……」

普通あなたじゃないんだから復活なんてしないし。

「むう、それは残念じゃのう」

そうこう言っているうちに、馬車はブティックの前に着いた。マルティムにここで待っているよう伝えたと、ペンタクルの入った鞆やソロモンの壺などの荷物は置いたまま、私達は馬車を降りた。ソロモンはまだ初めから着ていたオペラのような衣装のままだが、今日からはもう連れて歩いても恥ずかしい思いをしなくて済むだろう。

ブティックの扉を開けて中に入る。

「こんにちは……」

「あら、ミミ！ いらっしゃい！」

婦人服を整理していた、若い女性が声を弾ませた。栗色の髪を結び上げ、自作のお洒落な服を着ている。

「お久しぶりです、セシルさん」

ソロモンと来た時には彼女はお休みだったので、店主のおじさんに服を注文しておいたのだ。

「ごめんね～、ミミが来たときはちょっと出かけてて。でも注文の服はちゃんとできてるから！」

セシルさんは私より3つ上の、お姉さんのような人だ。彼女とその家族は昔、私の店の近くに店を構えていた。私が幼い頃よく面倒を見てくれたけど、パサーージュの中ではブティックの経営が厳しかったらしく、ここに引っ越してしまったのだ。でも私は顔馴染みということもあり、いつも服を買うときはこの店を利用している。

「えっと、その子に着せる服なのかしら？ ……ずいぶん劇的な格好をしてるけど」

彼女はソロモンを興味深げに見つめる。

「は、はい。なんか父がどこかの国から預かってきたみたいで……しばらくうちで面倒をみることになったんです」

私はこういうときのために考えておいた「設定」を披露した。

「あはは、ジェルマンさんらしいわ」

セシルさんは当然父とも親しかったし、私がペンタクル魔術を使うことも知っているけど、きちんと秘密は守ってくれているようだ。もし秘密が漏れているなら、私の店は魔術を見に来る人で繁盛しているはずだから。

「……………」

あれ？ そういえばソロモンは、店に入ったときから黙ったままだ。

「……ちょっとソロモン、挨拶くらいしなさいよ」

「え……？」

「あ、この子の名前なんです。ちょっと変わってるけど」

確かに普通ではありえない名前だし、仮名でも考えたほうがいいんだろうか。

当の本人はというと、頬を赤らめ、うっとりとしてセシルさんを見上げていた。そして、両腕を広げ、他の客の人目も気にせず高らかに詠い出した。

「愛する者よ、快活な乙女よ、貴女はなんと美しく愛すべき者であろう。

貴女はナツメヤシの木のように威厳があり、貴女の乳房はその房のようだ……！」

「……な……な……」

私は思わず絶句する。私のときと同じ、聖書の「雅歌」だ。

こ、この子、私を勝手に妻にするとっておきながら、堂々と私の前で他の女性を口説くなんて……っ！
自然と私の拳は震え、唇は噛み締められる。

「え、ええと……乳房がなに？」

セシルさんは困ったように笑って、私に解釈を求める。

「あ、え、えと、それは——」

私が言いあぐねているうちに、ソロモンはセシルさんにしがみついた。

「ほほほ、余はソロモンじゃ～。今後ともよろしく頼むぞ～」

そして気持ちよさそうに頬をセシルさんの胸にうずめる。

「あらあら、私に懐いちゃったのかしら？」

セシルさんは相手が小さい女の子（の姿）だからか、特に拒まず苦笑しているだけだ。

「こ、こらあソロモン！ 失礼でしょうがっ！」

私は慌ててソロモンをセシルさんからひっぺがえす。

「あはは、いいのよ。こんな可愛い子が着る服を作れたなんて嬉しいわ」

「ほほほ、そうかのう？ のうセシル、良ければ余の1002人目の妻にならぬか？」

「あはは、なあにそれ、オペラの台詞？ でもごめんね、私にはもう想い人がいるのよ。あなたと同じく、外国の人なんだけど……」

「む～それは口惜しや……。じゃが、余なら男以上にそちを悦ばせて——」

「い、いいかげんにしなさいっ！」

私はソロモンの柔らかい頬を引っ張る。

「い、いだだ……なんじゃミミ、妬いておるのか？」

ソロモンは懲りずにいやらしく笑って、

「安心せい、何人いようとも余は平等に愛して——」

「ええい、まだ言うかあ！」

今度はソロモンの両頬を引っ張る。

「ひいい、暴力は反対じゃ～」

「ちょっとミミ！ そんなにいじめちゃかわいそうじゃないの！」

セシルさんに真顔で諫められ、私は戸惑う。

「で、でもこの子は——」

言おうとして答えに詰まる。彼女の正体を話せば長くなるし、理解してもらえとも思えない。

「はあ……もういいから、服を見せてください」

抵抗するだけ疲れるだけだわ……。

「ほっほっほっ！ どうじゃどうじゃ!？」

「うふふ、とても似合ってるわよ、ソロモンちゃん」

新調した服を着たソロモンは鏡の前でくるくると回っている。

フリルがいっぱいの一般的な女兒用の服に、六芒星やヘブライ文字の刺繍があしらわれている。こんなデザインを注文したソロモンも問題だが、数日でこんな服を作ってしまうセシルさんの腕も驚嘆に値する。

「この文字の刺繍も、よく間違わずに縫えたのう？」

「え、ええ。前にもそういう文字を注文した人がいたのよ」

「ほほ、そうか……」

ソロモンは私の方を向いて、両腕を広げる。

「どうじゃ、ミミよ？」

「まあ、少しはまともな格好になったわね」

「無粋な答えじゃの～。王に対しては嘘でもおだてるものであろうが」

ソロモンは頬を膨らます。

「それより、その王冠はそのままなの？」

「当たり前じゃ。冠は王の証であるからのう、これだけは譲れぬぞ」

セシルさんはソロモンの頭をなでる。

「可愛くていいじゃない！ お姫様みたいだわ」

「ほほほ、そうか？ どちらかという余は女王なのじゃが……」

さて、服も受け取ったし。これ以上ソロモンがここにいたら、セシルさんの仕事の邪魔になるわね、うん。

「セシルさん、ありがとうございます。さあ、行くわよソロモン」

私はセシルさんに一礼すると、ソロモンの手を引っ張る。

「なんじゃ、もう行くのか？ 余はもうちょっとセシルと話が――」

「うふふ、二人ともこれからお出かけ？」

「はい。ちょっとブローニュの森にでも……」

「ブ、ブローニュ!？」

なぜか彼女は大きな声を出して驚いた。

「セシルさん……？ どうかしたんですか？」

「あ……う、ううん、い、いやあの、今朝の新聞でね、なんか変なことが起きてるって……」

彼女はなぜか慌てている。

「ああ、そうみたいですね。でも昼間ですから大丈夫ですよ」

「そ、そう？ でも、気をつけてね……」

「はい。ありがとうございます」

「また会えるのを楽しみにしておるぞ、セシルよ」

「うん、またね……」

私達は連れ立ってブティックから出たとたん、顔を見合わせた。

「なんか様子がおかしかったわね……」

彼女の慌てぶりはちょっと普通じゃなかった。何か隠しているのだろうか？

「うむ……ときにミミよ、余は思い出したぞ」

「え、何を？」

「うごめく森の木々と、幽霊楽団の正体じゃ」

「！ やっぱり悪魔なの……!？」

「うむ。彼奴は――」

「あら～！ ソロモンちゃんじゃな～い!？」

急に誰かの間延びした声が、ソロモンの言葉を遮った。

ソロモンの顔が一瞬で青ざめる。

「う……こ、この声は……」

振り返ると、そこには一人の若い女性が立っていた。髪をゆるやかに長く垂らし、酔っ払っているように惚けた顔をしている。もしかして、娼婦だろうか……？

「やっぱりソロモンちゃんだ～。着替えててもわかるんだから～」

「ソロモン、この人は……？」

妙なのは、セシルさんと同じように美人なのに、ソロモンが露骨に拒否反応を示しているところだ。

「気をつけよ、ミミ。こやつはベルフェゴール……。今は人間の真似をしておるが、紛れもない悪魔じゃ」

「っ!」

私は警戒して身を強張らせる。確かにソロモンのことを知っているなんて、悪魔たち以外にいなかった。

「しかもこやつは72柱ではない。よって余の命は聞かぬ」

「ええ!？」

そんな悪魔まで、パリに来ているっていうの……？

「ソロモンちゃんったら～。どっか行っちゃったと思ったら、こんな子と一緒にいたなんて～」

彼女——ベルフェゴールはハンカチを取り出して、悔しそうに嘔む。

「ふ、ふん、当然じゃ。いつまでも貴様なんぞと一緒にいられるか！ 余はこれからはこのミミと一緒に暮らすのじゃ！」

ソロモンは見せ付けるように、私に抱きついた。

「ソロモン……」

さっきは他の女性に手を出したくせに……まったく、調子いいんだから。

「ひどいわ～。あの頃はあんなに愛しあったのに～！」

ベルフェゴールはなにやら過激な発言をする。

「あ、愛し合った……!?!」

「ば、馬鹿を言うな！ だ、誰が貴様のような悪魔などと！」

ソロモンは両手両足をばたばたさせて否定する。

「でも～！ 今度こそは離さないんだから～！」

ベルフェゴールはソロモンに迫ると、その小さい身体をひょいっと抱き抱えた。

「な、何をする！ 放さぬか無礼者！」

「ソロモン！」

彼女はそのまま通りに向かって走り出した。その先には、座席だけの車——いわゆる「自動車」があった。馬なしで走る最先端の科学の産物だけど、物好きな金持ちくらいしか持っていないような代物だ。

ベルフェゴールがソロモンを抱えたまま座席に飛び乗ると、爆音とともに車が振動し始めた。

「はっし～ん！」

私が追いつく前に、自動車は火と煙を噴いて、通りを走り出した。その迫力の人々は驚き、周りの馬車も自然と道を空ける。悪魔の乗り物としては、確かにふさわしいかもしれない。

「ミミいいいいい！」

ソロモンが私を呼ぶ声が、瞬く間に小さくなっていく。

「ソロモン……！」

なんてこと！ こんなにあっさりさらわれてしまうなんて。

しかも今のソロモンは指輪をはめているけど、壺は持っていない。馬車の中に置いてきたのだ。悪魔が呼び出せないソロモンなんて、ただの無力な子供でしかない。とても自力では脱出できないだろう。

私が戸惑っていると、頭上から馬のいななきが聞こえた。

「お妃様！ お乗りくださいませ！」

振り向くと、マルティムの馬車が隣に来ていた。すぐに私は飛び乗る。

「マルティム、あの自動車にソロモンが！」

「わあってますって！ 飛ばしやすからしっかり掴まってくださいませ、お妃様！」

「だ、誰がお妃様よ！」

マルティムは帽子を深くかぶり直すと、勢いよく手綱を引っ張った。

馬車は走り出すとぐんぐん加速していき、前の馬車を次々と追い抜いていく。車輪は激しく石畳を軋ませ、その振動が伝わってくる。

やがて前に煙を噴きながら走る自動車が見えてきた。自動車はシャンゼリゼ通りを真っ直ぐ下ってゆき、コンコルド広場で左折したかと思うとすぐに右折、リヴォリ通りに入る。しばらく走った後右折して、ルーヴル美術館前のカルーゼル広場で停車した。

ベルフェゴールはソロモンを抱えて、なぜか美術館に向かっていく。

その直後、私たちの馬車も広場に到着した。私は鞆と壺を持って馬車から飛び降り、二人を追いかける。

ルーヴル美術館は休館日のようで、辺りには誰の姿も見えなかった。

かつては王家の宮殿ただただあって、中の宝物を見ずとも圧倒されてしまう。壮麗な建物が庭園を囲むように建っており、その規模はパリでも最大と言える。

ベルフェゴールは北側の棟「リシュリュウ翼」の扉を鍵で開き、中に入る。

な、なんで美術館の鍵を……!?

「ま、待ちなさい！」

「うふふ、オルヴォワ〜♪」

そして叫ぶ私に手を振り、すぐに扉を閉めた。

私が扉に辿りついたときには、すでに内側から鍵がかけられていた。

「くっ……」

まさか美術館の中に逃げ込むなんて。一体ここでソロモンをどうするつもりなんだろう……？

ちょっと心配だけど、今日のところは扉は全部施錠されているだろうし、明日開館しているときに直すしか——
ん？ 鍵……？

「そうだわ！」

私は鞆から「水星の第5ペンタクル」を取り出し、ドアに押さえつけた。目を閉じて、静かに聖書の「詩篇」の一節を唱える。

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王が入られる……」

ペンタクルが虹色に輝く。やがてその光は扉全体に広がっていき……ガチャ、という音がした。

勝手に美術館に入るなんて泥棒みたいだけど、盗まれたのはこっちのほうなのだ。私は周囲を見回し、誰にも見られていないことを確認してから、そっと扉を開いた。

Louvre ～美術館～

奇妙なことに、扉を開けて入った部屋には何もなく、下へ降りる階段があるだけだった。おそろおそろ階段を降りると、そこには驚愕の空間が広がっていた。

ルーヴルが宮殿になる前、中世の城砦だった頃の遺構。頑丈な石造りの壁に囲まれた通路に、無数の歯車が並んでいる。何かの機械だろうけど、今は全て止まっているみたいだ。ベルフェゴールが作ったのだろうか……？

私もルーヴルには何度か行った事があるけど、地下にこんな仕掛けがあるとは知らなかった……。

所狭しと並んでいる歯車と鉄管の間を慎重に進んでいくと、やがて奥から誰かの話し声が聞こえてきた。

「え～い、いいから手を離さぬか！　ここまで戻されたら今更どこにも行かぬわ！」

「え～、だってえ～」

間違いない、ソロモンとベルフェゴールだ！

私は鋼鉄の箱の影に隠れながら、ひとまず様子を伺う。

「あ……！」

しかし、思わず声が漏れてしまう。



ベルフェゴールのその姿は、本性である悪魔のものであったのだ。ねじれた長い角と先端の尖った尻尾は彼女が人間でないことを表し、下着と見まがうような扇情的な服装は、この国の住人ではないことを表していた。ただ、その他は以前のまま……人間の女性のみままであり、どこか背徳的な美を感じさせる。

「あれ～？　うそ～？」

ベルフェゴールはこちらを見て、首を傾げた。

「——！」

どうしよう、早速気付かれてしまった。いくらペンタクルがあるといっても、悪魔……それも力が未知数の相手に、どうにかできるわけがない。

「どうしたのじゃ？」

「はあ～も～。せっかくソロモンちゃんを取り戻せたと思ったのに～。困ったちゃんね～」

ベルフェゴールは残念そうに肩をすくめた。

「まさか、ミミが来ておるのか!？」

「それなりに使える子みたいね～。これはこれで面白いかも～」

ベルフェゴールはくすくす笑い出すと、ソロモンから手を離し、小さい箱型の椅子に腰掛けた。

「お！」

ソロモンはその際に、ベルフェゴールから急いで離れる。

気付かれた以上もう隠れていても仕方がない。私も立ち上がり姿を見せた。

「ソロモン、こっちよ！」

「おお、じゅてーむ！」

ソロモンは私に走り寄り、そのまま抱きついた。

「信じておったぞ、きっと助けに来てくれると……！」

「ま、まあ一応ね……」

「さあ、再会の接吻じゃ！ ん～っ」

「ほら、これ！ 肌身離さず持ってなさいよ」

ソロモンのタコ口に壺を押し付け、横目でベルフェゴールの様子を伺う。

「うふふ、別に何もしないって～。 ミミちゃんだっけ～？ あなたの勇気に免じて、今日のところは引いてあげる～」

「そ、そう……」

「ささ、とっとと我が家に帰ろうぞ」

ソロモンは壺を袖にしまうと、私の手を引っ張る。

まあ、それでもいいんだけど。気になることが多すぎるし、このまま帰るのはもったいない。72柱に属さず、ルーヴルの地下で機械に囲まれている悪魔……。事件と関係ないわけがない。

「その前に、ちょっと聞きたい事があるわ」

「お、おいミミ……」

「へえ～？ なあに～？」

ベルフェゴールは興味深げに目を光らせる。

「人々がソロモンの悪魔を召喚できるようになったのは、あなたの仕業なの？」

まずは単刀直入に聞いてみた。もっとも相手は悪魔だし、素直に真実を話すかは微妙だけど。

「ま～、失礼ね～。わたしはソロモンちゃんを復活させてあげただけなのに～」

彼女は表情を変えず答えた。

「え……そうなのソロモン？」

「ま、まあもう……」

「なんだ、それなら仲間じゃない。何をそんなに怖がってるのよ？」

「こやつは余に、それ以上の関係を望んでおるからじゃ……」

「……それってつまり……」

恋人のような関係……ってことだろうか。

けど彼女の姿は、人間の女性に角と尻尾が生えている程度。美人なんだし、そんなに嫌がることもない気もするけど……まあ、女好きのソロモンにも拘りがあるのだろう。

「当たり前じゃな～い。何しろわたしたちは、三千年前からの仲なのよ～？ その頃のわたしはケモシュとかバアル・ペオルとか呼ばれててね～。ある地方の人間達からは、ちゃんと神様として崇められてたんだから～」

「悪魔が……崇められてた……？」

「うむ、だが我が国から見れば異教の神はすなわち悪魔であった。本来崇拝することはもちろん、その存在さえ認められなかったのじゃ」

「でもね～、ソロモンちゃんはわたしを認めてくれたのよ～。人々にわたしを崇めることを許してくれたの～」

「べ、別に貴様に限ったことではないわ！ モロクもアシュトレトも、異国の神は皆認めてやったのだ。余は神や信仰を

差別するという考えは気に入らなかったからの」

「なるほどね……だけど、神様は怒ったんでしょ？」

「無論じゃ。余の死後、王国が分裂してしまったのはそのせいであろう……」

ソロモンは顔をわずかに曇らせた。

「だけど、ソロモンちゃんはわたしたちから見れば正しいことをしたのよ～？ だからわたしはソロモンちゃんの魂を引き取って、生き返らせてあげることにしたの～」

「まあ無事復活できたのは良いが……それにしても時間がかかりすぎじゃ！」

「ごめんね～。身体はもちろん、壺と指輪も直すのに意外と手間取っちゃって～」

ベルフェゴールは舌を出して、あまり悪気がなさそうに謝る。

「じゃあここの機械は、ソロモンの身体や道具を復活させるための……？」

「そうよ～。科学と魔術の結晶なの～」

人間を蘇らせるなんて、なんという技術力の高さだ。あんな自動車くらい、彼女にとっては朝飯前なのだろう。

「わたしはけっこう前からここを工房にして住んでいたの～。上が美術館になる前からね～」

ということは……100年以上前？ 彼女にとっては、上に住んでいる住人が変わっていっただけなのだろう。

「しかしこやつは、復活した余に当代の知識を教えたのはよいが、ここから一歩も出してくれなかったのじゃ！」

「だって～逃げられちゃうと思ったんだもん～」

「余はこやつが留守のときに隠し扉を見つけてのう。あの地下道に逃げ込んだというわけじゃ」

「確かに、ここからうちのパサージュまで、そんなに離れてないものね。そういえば、デカラビアは最初から壺にいたみたいけど……？」

「うん～。ソロモンちゃんの悪魔も探してあげただけど、デカラビアちゃんしか見つからなかったの～」

「まったく、もっと頭数が揃えておかぬか……。さあ、もう十分であろう？ 余はここにいると、あの地獄の日々を思い出して吐きそうになるのじゃ」

ソロモンは気分悪そうに、口を押さえている。

「そ、そんなに……？ じゃあそろそろ——」

そのとき、突然けたたましく電鈴の音が鳴り響いた。

「な、なに!？」

「う～ん、どうやら美術館（うえ）の方で何かあったみたいね～」

ベルフェゴールは椅子から立ち上がると、片腕を上げて踊るように回転した。瞬時に彼女は最初に見た人間の姿格好に戻る。

「表のお仕事しなきゃ～」

「それってまさか……」

ここで働いているってこと？

「うふふ、係員でもない、ここに自由に出入りすることもできないでしょ～？」

だから平然と建物の鍵を持ってたりしたんだ。

「さてと……みんなも来る～？」

ベルフェゴールの工房から階段を昇り、扉を開けると、そこはもうルーヴル美術館の館内だった。様々な絵画や彫刻などが並ぶ、世界最高峰の美術館だ。

電鈴が鳴り響く中、廊下の向こうから何者がが走ってくる。

「あ～、泥棒だ～」

「ええ!？」

泥棒は全身白尽くめの装束を着ており、黒い紐のようなもので一枚の絵を胸に貼り付けていた。明らかに不審人物だ。

彼はこのままこちらに向かってくる。女子供には止められない自信があるのだろうか、意にも介していない。

「そこまでよ～」

ベルフェゴールが道を遮ろうと両腕を広げる。

「む、あやつは……!？」

「え——!?!」

彼が近づくとわかった。紐だと思っていたのは、長い蛇だったのだ。まさか、悪魔——!?!

ソロモンは彼に向かい、叫んだ。

「アンドロマリウス！」

「ソ、ソロモン陛下!?!」

彼はその声に驚き、私たちの目の前で立ち止まる。

「何をしておるのじゃ！ そちが盗みなどと——」

「お許してください、陛下！」

彼はそれだけ言うと高く跳躍し、私たちの頭上を軽々と飛び越えた。

「！」

美術館の高い天井が災いした。

振り返ったときには既に、彼は後ろの廊下を走っていた。そのまま横の窓に飛び込み、勢いよくガラスを割って外へ飛び出す。

「逃がさぬ！ デカラビア！」

ソロモンは懐から壺を取り出し、左手の指輪を高く掲げた。指輪から印章が光って浮かび上がる。壺が煙を噴き、その中から五芒星の姿を持つ悪魔が現れる。

「その窓から出ていったアンドロマリウスの行方を知らせるのじゃ！」

デカラビアは口を開き、次々と小鳥を吐き出していく。小鳥達は割られた窓から外へ飛んでいった。

「大丈夫かしら……？」

「いかに彼奴が地を速く走ろうと、空の鳥から見ればなんてことはないからのう」

「さすがソロモンちゃん～。これで安心ね～」

ベルフェゴールは両手を合わせて和む。

「ソロモン、今のはあなたの配下の……？」

「うむ、そうなのじゃが……」

ソロモンはなにやら考えている。

すぐに係員らしき男性が、息を切らしてこちらに走って来た。

「た、大変だ！ 泥棒が……」

「あ～、わたしも捕まえようとしたんだけど～。そこから逃げられちゃって～」

係員は割れた窓を見て膝をつく。

「な、なんてこった……」

「ね～、何を盗まれたの～？」

「そ、それが……よりによって『モナ・リザ』なんだ……」

「あらま～」

「ええ!?!」

モナ・リザはこの美術館のシンボルとも言える、世界的にも有名な絵だ。

「ほほ、庶民にも宝物を見る機会を与えるという考えは悪くはないが、盗人が目をつけるのも当然じゃのう。まあ案ずるな。絵は余が取り返してしんぜよう」

ソロモンは胸を張って言った。

「ほ、本当に大丈夫なの……？」

「彼奴の居場所さえわかれば、捕まえるのは造作もないことじゃ」

私たちを見て怪訝そうな顔をした係員がベルフェゴールに尋ねた。

「ところで、この子達は……？」

「わたしのともだちよ～。見学したいって言うから案内してあげてたの～」

取り乱さずに答えるベルフェゴール。さすがだ。

「魔法使いだから、きっとモナ・リザを取り返してくれるわ～」

「ちょ、ちょっと……！」

何軽々しく正体をばらしてるのよ!?

しかし彼は、疲れたように苦笑しただけだった。

「はは……期待してるよ」

まあ普通本気にしないか。

「こんなこと新聞記者にでも嗅ぎつけられたら、大騒ぎだよ。だからといって急に閉館するわけにもいかないし……とりあえず、館長に報告してくるよ」

「お願い～。わたしはこの窓直しておく～」

彼が去って行くと、私はため息をついた。

「……やっぱり誰かがあの悪魔を呼び出して、モナ・リザを盗ませたのかしら？」

先日呼び出されたシャックスと同じように。

「それが妙なのだじゃ。彼奴……アンドロマリウス伯爵は、命じられても盗みを働くような奴ではない。むしろ盗人や悪人を見つけ罰する、正義の悪魔なのだじゃ」

「なんだか悪魔らしからぬ悪魔ね……」

ストラスみたいなただのフクロウもいることだし、むしろ人々の想像通りの悪魔というのは珍しいのかもしれない。

話しているうちに、一羽の小鳥が割れた窓の隙間から入ってきた。ソロモンの耳元で鳴いて報告する。

「ほう……そうきたか。他の鳥達には引き続き彼奴を追えと伝えよ」

小鳥は一声鳴くと窓から出て、再び空へ戻っていった。

「どうやら敵は一匹ではないようじゃのう……」

「え、どういうこと……？」

「アンドロマリウスは西の森へ逃げ込んだそうじゃ」

「! ブローニュの森!？」

「余の予想が正しければ、そこにも悪魔がおる。おそらく二匹の悪魔が手を組んでおるのじゃろう」

「それは、手強そうね……」

どのみちブローニュへは行くつもりだったんだし、首尾よく両方とも捕まえられればいいけど……。

「ふたりとも、がんばってね～。わたしはここで窓を直さないといけないから～」

ベルフェゴールがひらひらと手を振る。

「ふん、誰も貴様の力を借りようとは思っておらぬわ! では参ろうかのう、ミミ!」

「え、ええ!」

今回は悪魔の捕獲だけではなく、モナ・リザを取り返すという目的もある。……むしろ、そちらのほうが責任重大な気がするけど……。

Concert ～演奏会～

私達はマルティムの馬車に乗り、街の西部に広がる広大な緑地——ブローニュの森へと向かった。
もとは王家の狩猟場だったが、今や競馬場や動物園も併設している、市民の憩いの場だ。
だんだん薄暗くなってきたので、乗馬や自転車遊びに興じた人々が、私たちと入れ違いに門へと向かっていく。
日が沈めば森の中は真っ暗になり、悪魔の追跡は困難になるだろう。急がないと……。

馬車が入れるところまでは馬車で進み、そこから先はデカラビアの鳥の案内に従って、鬱蒼とした木々の中を歩いていった。ここまで来ると、私たちの他にはもう誰もいない。

ソロモンはマルコシアスを呼び出し、私たちの前を歩かせる。
「あの悪魔は、こんなところを通過していったの……？」
「そのようじゃのう。この森の奥に召喚者がいるか、あるいは……」
マルコシアスがふいに立ち止まった。
「お気をつけて！ 前方に何かがあります！」
「え!?!」
私達は身構える。木々の間から、うねうねと何かが動いているのが見える。
「な、何あれ……？ 蛇？」
「いや、あれは木の枝じゃ」
「え!?!」
枝が……動いているの!?

さらにどこからか、トランペットの音色が聞こえてきた。続いて演奏が始まる。この軽快な曲は確か……喜歌劇「天国と地獄」の序曲……？

「こ、これって……幽霊の楽団……!?!」
新聞で言っていた通りだ……！
演奏はだんだんと大きくなり、それに合わせて踊るかのように、周りの木々が風もないのに揺れ動き始めた。
「こ、これって……!?!」
「ふむ、やはり罌であったか」
「え——」
「アンドロマリウスはわざとこの道を通ったのじゃ。この森の木々に追っ手を捕まえさせるためのの」
「な、なんですって!?!」
そのことを知っていて、むざむざ罌にかかったっていうの!?

「案ずるな。この演奏のせいで大勢おるよう感じられるが、相手は一匹じゃ」
ソロモンは木々に向かって叫んだ。
「聞こえるか、アムドウスキアス公爵！ この演奏で森の木々を操っておるのはそちじゃろう!?! 余はソロモンじゃ！ 道を開けい！」
「……………」
ソロモンは初めから説得するつもりだったらしい。
しかし演奏は止む気配はなく、木々の枝が四方からじわじわとこちらに伸びてくる。
「き、聞こえぬのか、アムドウスキアス！ 余じゃ、ソロモンじゃ！」
マルコシアスはかぶりを振った。
「どうやら自らの演奏に夢中で聞こえていないようですね……」
「あ、ありうる話ね……それに、演奏してる本人はどこにいるの？」
「木々に隠れているようです。匂いからしてこの近くにはいるはずですが……」
「ふん、ならばあぶり出すまでじゃ！ マルコシアス、全て焼き払ってしまえ！」
「ちょ、ちょっと待って！ ここは森なのよ!?! そんなことしたら大火事になるわ！」
なるべく騒ぎは起こしたくないのに、大事件になってしまう。
「じゃ、じゃあどうしろというのじゃ!?!」

ソロモンは両手を振り上げ、痲癩を起こす。

そうこう言い合っているうちに木々の枝はますます伸びてきて、私達は背中を合わせる。

「お二人とも、伏せて！」

間近に迫った木が、長い枝を振り下ろしてきた。

「きゃ——」

マルコシアスはそれを掴んで食い止め、噛み付いて折る。

次に横から別の木の枝がなぎ払うように振るわれる。すぐにマルコシアスは横に飛び、前足で枝を防いでそのままへし折る。

その間私達はうずくまっていることしかできない。

いくら折られても、次から次へと枝は四方八方から襲い掛かる。

「いかん、マルコシアスだけでは限界があるぞ……！」

なんとか、なんとかしないと！ この状況を打破するペンタクルは、ええと……。

私はとにかく鞆を開けて、ペンタクルを漁る。

「ミミ、なんとかせい！ 焼くなと言ったのはそちである!？」

「は、話しかけないでよ！ 今考えてるんだからぁ……っ！」

ええと、これは愛を得るものだし、これは名声を得るものだし……。

「ぬわあああ！」

ソロモンの悲鳴。振り向くと、マルコシアスが枝を折っている隙に、ソロモンが別の枝に掴まれて宙に浮いていた。

「ソロモン！」

「陛下！」

マルコシアスが飛んでソロモンを助けに向かうが、左右から枝が伸びて阻まれる。さらに彼女の背後から枝が伸び、その後ろ足を掴む。

「しまった！」

前からの枝が首に絡みつき、ついにマルコシアスも捕まってしまった。

「マルコシアス……！」

しかもソロモンとマルコシアスは向かい合わせに宙に浮いており、最終手段の炎も封じられた。

ま、まずい……このままじゃ全員……！

「ミミ！ 『土星の7』じゃ！」

「え!？」

突然、枝に捕まったソロモンが私に叫んだ。

私はわけのわからないまま、とにかく指定された「土星の第7ペンタクル」を鞆から見つけて取り出す。なぜこれを使えと言われたのかわからない。だけど私は彼女を信じて、ペンタクルを地面に押し付け、叫んだ。

「その口は呪いと、欺きと、しえたげとに満ち、その舌の下には害毒と不正とがある……！」

ペンタクルが黒い光を放ち、瞬く間に亀裂のように地面に広がっていく。地の底から唸るような音が響き渡り、大地が揺れ始める。

ソロモンは、これで自分達を振り落とせっていう意味で……？

周りを見渡すと、枝の動きが止まっていた。あの演奏も途切れ途切れになっている。

「あ……！」

そうか！ ソロモンがこのペンタクルで地震を起こすよう指示したのは、あの演奏を止めるためだったんだ！ 確かに地面が揺れている状態では、まともに演奏なんてできそうもない。

全ての枝が止まっている内にマルコシアスは枝を破って抜け出し、茂みの中へ飛び込んだ。

「ぎゃあ……っ！」

何者かの悲鳴と共に演奏が止んだときには、地震も収まっていた。

私は枝に引っかかったままになっているソロモンを降ろしてあげた。

「ふー、危機一髪であったのう」

「まったくだわ……」

そもそもソロモンが前もって罨のことを教えてくれたら、こんな目にはあわなかったはずだけど……。

でも彼女の機転のおかげで助かったのだから、文句は言わないでおこう。

やがてマルコシアスが演奏していた悪魔——アムドゥスキアスの襟首をくわえて茂みから出てきた。

彼の頭は馬のものだが、額から一本の長い角が生えていた。いわゆる一角獣（ユニコーン）だ。身体は人間と同じで指揮者のような服を着ていたみたいだけど、既にマルコシアスに裂かれてボロボロになっていた。

どうやらソロモンが言ったとおり、演奏は彼一人で行われていたらしい。

ソロモンは両手を腰に当て、彼を睨み付ける。

「まったく、余の呼びかけに答えぬからじゃぞ」

ソロモンを見て、アムドゥスキアスは今さら慌てる。

「ソ、ソロモン陛下……!? な、なぜ名乗って下さらなかったのですか!? 陛下だと知っていればこんなことは——」

「何度も名乗ったわ、たわけ！」

ソロモンは壺でアムドゥスキアスの頬を殴った。

「ぶふう！」

それを見ていたらなんだか力が抜けてしまい、私は深くため息をついた。

「それで、そちはここで何をしておったのじゃ？」

「はい。私は人間に呼び出され、この森を守るように言われたのです。アンドロマリウス以外は捕らえるように、と」

「やはり、彼奴と手を組んでおったのか」

「アンドロマリウスの目的は詳しくは知りません。彼は陛下たちが来られる前に、何かを抱えてこの森を通っていきました」

「モナ・リザだわ……」

小鳥がソロモンの前に飛んでくる。

「うむ、彼奴はこの先におるようじゃ。人間二人と一緒にの」

「おそらくアンドロマリウスの召喚者と、アムドゥスキアスの召喚者ね」

二人の人間がそれぞれ悪魔を呼び出して、協力してモナ・リザを盗んだのだろう。あれだけの名画なら、売却したり脅迫したり、どんな用途にも使えるはずだから。

「アムドゥスキアス、そちは余と来るのじゃ。良いな？」

「はっ、仰せのままに。序列67番、アムドゥスキアス。呼んで下されば、いつでも我が王のために演奏会を開きましよう」

「ほほ、考えておこう」

ソロモンの指輪からアムドゥスキアスの印章が光って広がる。彼は煙に包まれ、ソロモンの壺の中に吸い込まれた。

「さて、もう一匹もひっ捕らえねばのう」

「ええ。モナ・リザも、無事だといひけど……」

Justice ～正義～

とうのほんに 私達は再びデカラピアの鳥の案内に従い、森の中を進んでいく。もうだいぶ暗くなってしまった。

やがて歩道に出ると、一台の馬車が停まっていた。その隣で女性らしき人影が、落ち着かない様子で辺りをうかがっている。

「む、あれじゃな!？」

「あそこにモナ・リザが……？」

馬車に近づくと、女性は私たちに気付いたようで、御者に何か叫んで馬車に乗り込んだ。そして馬車が走り出す。

「あ、逃げるつもりだわ！」

「逃がすか！」

私たちが馬車を追おうとすると、荷台から白い人影が飛び出し、目の前に着地する。

「む、アンドロマリウス……！」

「陛下……ここから先は、お通しするわけには参りません。私の『正義』にかけて……！」

彼は大の字に四肢を広げ立ち塞がる。右腕から左腕にかけて長い蛇が巻きついている。モナ・リザを持っていないところを見ると、やはり既にあの馬車に移されたようだ。

「何か事情があるようじゃのう。しかしこちらもいちいち聞いておる余裕はないのじゃ」

ソロモンの前にマルコシアスが歩み出る。

「マ、マルコシアス……！」

アンドロマリウスの声が微かに震える。

「私と戦うつもりですか、アンドロマリウス……？」

マルコシアスが威嚇するように低く唸ると、口元から炎がこぼれ、夜道を照らす。

「ふっ……無論だ」

アンドロマリウスは身構えた。

「序列72番、アンドロマリウス。例え負けるとわかっていても、最後まで己の正義を貫こう……！」

「その意気やよし！ いざ、尋常に勝負せよ！」

マルコシアスは吼えて、翼を広げた。

「うおおおおっ……！」

アンドロマリウスはマルコシアスに正面から殴りかかる。対するマルコシアスはその場から一歩も動かず、炎を吐いた。

「ぎゃあああああ！」

アンドロマリウスは顔面から炎をまともに食らってしまい、その場をぐるぐる走って回りだした。

「あぢ！ あぢ！ あぢいいいい！」

「……………」

見たまんまの結果に、私は開いた口が塞がらない。

「馬鹿な奴じゃ、丸腰でマルコシアスに挑むとはのう。そもそも彼奴は戦には向いておらんのだじゃ」

ソロモンは左手の指輪をアンドロマリウスに見せるように向けた。

「ほれ、どうする？ このままそちの正義を貫いて焼け死ぬか、諦めて余に投降するか——」

「とうこおおおお！」

「ほほ、まったく根性のない奴じゃのう」

「まあ、無理もないけど……」

ソロモンの指輪からアンドロマリウスの印章が広がると、彼は煙に包まれ、そのまま壺の中に吸い込まれた。

「さて、これで悪魔は両方とも捕まえたわけじゃが……」

「あの馬車はもう行っちゃったわ……このままじゃモナ・リザが……！」

このまま行方不明とかになったらどうしよう……!？」

「うむ、わかっておる」

ソロモンは壺を前に出し、左手を上げる。

「出でよ、シャックス！」

「！」

壺から出てきたのは、この前捕まえたシャックスだ。人間の腕を持った、大きい鳥の姿をしている。

「やれやれ、仕事ですか？」

彼はこの前、百貨店の中にいる人々を無差別に襲った張本人だ。

「うむ、この道の先を馬車が走っておるはずじゃ。それに乗っておる人間に呪いをかけよ」

それを聞いてシャックスは、長いくちばしを開いて笑い出す。

「カカカ、そういうことならお任せあれ！」

シャックスは地を蹴り、空へ飛んでいった。

「さて、あとは急ぐことはない。のんびり行くかのう」

ソロモンは屈伸しながら、歩道を歩き出した。

「確かにあの呪いをかけられたら、その場で立ち往生するしかないものね」

なんか卑劣な気もするけど……。

「でもあの悪魔……裏切ったりしないかしら……？」

前の召喚者のときみたく、命令を無視して勝手な行動をされたらかなわない。

「心配は無用じゃ。余と再び契約した悪魔は、余の意に逆らえば即、壺の中に戻されるからのう」

「なるほど、そこが他の召喚者とちがうところね」

さすが、元悪魔達の主人なだけはある。

ソロモンと契約した悪魔は、完全に彼女の制御下に置かれる。それに対して、一般人はグリモワールで悪魔を呼び出しても、何も制御できないのだ。多少魔術の心得がある私でさえ、襲ってくるマルコシアスを止められなかったのだから。

やはり今のパリの状況は、極めて危険であると言わざるを得ない。

私たちが歩く間にも、デカラビアの小鳥は馬車と私たちの間を往復し、逐一首尾の報告に来ていた。

そして……やがて停まっている馬車が見えてきた。

馬車の元に、一組の男女が嘆きながらうずくまっている。呪いをかけられて目が見えなくなっているのだ。

馬車の上に仕事を終えたシャックスが座っていた。

「遅かったですねえ、閣下」

「よくやった、シャックス。ミミ、今のうちに絵を取り返してしまおうぞ」

「ええ！」

私は馬車に乗り込み、荷台を探した。すぐに布に包まれた板を見つけたので、降りて布を剥がしてみると……確かにあのモナ・リザだった。

「良かった、とりあえず傷はないみたいだわ……」

描かれた女性が、私に神秘的な微笑みを向けている。あの名画の……この世にたった一枚しかない本物が、今自分の腕の中にあると思うと、胸が高鳴るのを抑えられない。

ソロモンは絵を横取りし、感想をつぶやく。

「そんな盗むほどの絵でもないと思うがのう。眉毛もないし」

「……どうせあなたは美術品なんて興味ないんでしょう」

「いや、ベルフェゴールに館内の写真は見せてもらったが、余にも欲しい作品はあるぞ。『ミロのヴィーナス』や『水浴のディアナ』、『グランド・オダリスク』とかかのう、ほほほ」

「それって裸の作品ばっかじゃない……」

まったくこの子は、そういうことしか考えられないんだろうか。

「そ、その声は……ミミ……!？」

「え……？」

うずくまっていた女性が、立ち上がってこちらを向く。

「！ セ、セシルさん……!？」

私は近づいて彼女の顔を確認する。間違いなし、セシルさんだ。

「な、なんでセシルさんがこんなところに……!？」

「ミミこそ、なんでここに……？」

「やはり、セシルであったか……まあ、予感はしていたがのう」

「え……？」

「彼女が余の名を聞いて驚いたこと、ブローニュと聞いて慌てたこと、ブローニュでアムドゥスキアスが呼び出されたことから予想できたことなのじゃ。この服のヘブライ文字を間違わずに縫えたのも、召喚用の魔法円を作成した経験があるからじゃろう。あの場で問い詰めればよかったのじゃが、ベルフェゴールにじゃまされてしまうての……」

「そんなことはもういいから！ 早く呪いを解いてあげて！」

とにかく、セシルさんがあのときのおばさんと同じ目にあっているのが耐えられない。

「ふむ、そうじゃの。絵も取り返したし……そろそろ呪いを解いてやるのじゃ、シャックス」

「そうですねえ、二人しかいなかったんで反応も見飽きました」

シャックスが指を鳴らすと、二人はあっと叫んだ。セシルさんの瞳にも光が戻っていた。

「ピンセンツォ、けがはない？」

「ああ、セシルこそ大丈夫かい？」

「ええ、私は大丈夫……でも、モナ・リザが……」

セシルさんはソロモンの腕の中にあるモナ・リザを見た。

「ソロモンちゃん……」

「セシルよ、この服を縫ってもらった恩を仇で返すようで悪いのじゃが……この絵は美術館に返させてもらうぞ」

「二人とも……森の木に捕まらなかったの？」

「ソロモンは魔術師なんです。悪魔は両方とも彼女が捕まえたので……」

「うむ、アムドゥスキアスもアンドロマリウスも、今や我が壺の中じゃ」

ソロモンは壺を掲げて見せた。ソロモンの両側には、シャックスとマルコシアスが控える。

「あ……あの子は一人であんなに悪魔を使役しているっていうのか……!？ 僕達は一人一徳で精一杯なのに……」

セシルさんと組んでいた若い男性——ピンセンツォさんが驚く。

「その服の刺繍から、もしかしたらとは思ったけど……確かにミミとジェルマンさんの知り合いなら、当然の話ね。これじゃあ、かなうわけないわ……」

セシルさんも肩を落とした。

「あの……セシルさん。どうして、モナ・リザを盗もうと思ったんですか……？ 悪魔の力を借りてまで……」

私は何より、親しい人が悪魔を使って犯罪をしてしまったことが、やるせなかった。

「待ってくれ！ 彼女は何も悪くないんだ。全部僕のせいなんだ……」

「ちがうわ、ピンセンツォ！ 私が悪いのよ。私があんな本を見せなければ……」

「本って……グリモワールですか？ 『ソロモン王の小さな鍵』という……」

「え、ええ……」

彼女は私にグリモワールを手渡した。やはり、まだ出版されてから何年も経っていない本だ。

「お客さんから噂話を聞いたのよ……。この本を使えば、誰でも悪魔を呼び出せて、自分の願いを叶えることができるって……。もうどこの書店でも売り切れてるらしいけど、私は運良く売れ残りを見つけることができたから、とりあえず確保しておいたの」

「もうそんなに噂になっていたんですか……」

「だけど実際、私は悪魔を呼び出すっていう危険を冒してまで叶えたいことってなかったから……本はしばらく机の中で眠っていたの。そんなとき……街中で彼と会った……」

「僕はイタリアから、絵を学びにパリへ来たんだ。この街には芸術家達が集まってくるからね……。ルーヴル美術館を探していたとき、歩いていた彼女に道を聞いたら、案内してくれたんだ」

「それから私達は意気投合して、一緒にルーヴルへ通うようになったの……」

「僕は彼女と一緒に、絵の由来などを係員に聞いていたんだ。そして、あのモナ・リザの由来を知った……。あれはルネサンス期の天才イタリア人、レオナルド・ダ・ヴィンチの作。そう、本来ならば我がイタリアが所蔵すべき作品なんだ……」

彼は拳を振り上げ、叫んだ。

「しかし！ ナポレオンが戦利品として我が国から奪ったんだ！ だから僕は、それを取り返そうとした！ 本来あるべきはずの場所へ戻すために……！」

「ナポレオンというと、確かあの凱旋門の皇帝じゃな、ミミ？」

「え、ええ……それはそう……なんだけど……」

おかしい……彼の言い分は何か引かかる。

引き続きセシルさんが語り始めた。

「私は歴史のことはよくわからないけど、ただ、彼の力になりたいと思って……この本を紹介したの」

「僕はアンドロマリウスを、セシルはアムドゥスキアスと呼び出し、作戦を計画した。アンドロマリウスがモナ・リザを盗み、森へ逃げ込む。追っ手はアムドゥスキアスが木を操って捕まえる。悪魔達が僕たちの馬車に絵と共に乗り込み、駅まで行って列車に乗り、そのまま国外へ脱出する——。アンドロマリウスは事情を話したら、快く引き受けてくれたよ」

「夜中にアムドゥスキアスの力を練習しているとき、誰かに見られちゃってたのね。今朝の新聞に載ってたから焦ったわ……」

「世間に感づかれた以上、直ちに決行すべきだと思ったんだ。本当は深夜まで待ちたかったけど、アンドロマリウスが夜襲は卑怯だと言って聞かなくてね……」

彼は肩をすくめた。

「ほほ、彼奴の言いそうなことじゃ」

彼らの言い分を一通り聞いた後、ようやく私は引かかっていたことに思い当たり、ため息をついた。

「……事件の経緯はだいたいわかりました。この事件が、単なる勘違いから始まったということも……」

「え……？」

「どういうことじゃ、ミミよ？」

「モナ・リザはナポレオンが奪ったんじゃないよ。初めからフランスにあったんですから」

「な、なんだって……!？」

「晩年ダ・ヴィンチは、当時のフランス国王フランソワ1世のもとで活動していたんです。モナ・リザはダ・ヴィンチの手元にありましたが、彼の死後王の手に渡り、そのまま一度もフランスを出ることはなくルーヴルに置かれるようになったはずですよ」

いつもの読書で培った雑学が、思わぬところで役に立った。

「でも、係員の人は確かにそう言ってたわよ……？」

ん？ ルーヴルの係員……？

「……その係員って、間延びしたような口調の、若い女性ですか？」

「あ、ああ。きれいな人だったけど……」

「もう、ピンセンツォったらこんなときに！」

私はソロモンと顔を見合わせる。

「やれやれ……黒幕ははっきりしたようじゃの」

「そうね。絵を返すついでに、問い詰めましょう……！」

ベルフェゴールは一体なんのつもりで、彼らに嘘を吹き込んだのだろうか？ やはり彼女も悪魔、油断ならない相手だ。

「まあ、そういうことじゃ。そちは偽りの歴史を教えられ、騙されておっただのじゃよ」

ピンセンツォさんはその場がすっかり両手と両膝をついた。

「……なんてことだ……僕が間違っていたなんて……」

セシルさんは彼の肩に手を寄せ、慰める。

「ピンセンツォ……でも、大事にならなくてよかったじゃない。モナ・リザも破損していないし……」

「いや、僕の無知と浅はかさが原因で、美術館に迷惑をかけたことは事実だ……」

彼は立ち上がり、私達に真っ直ぐ向き合った。

「警察に自首するよ。悪魔を使ったことが信じてもらえるかはわからないけど、罪は罪だからね……」

「だ、だめよピンセンツォ！」

セシルさんは彼の腕を掴んで引き止める。

「……そ、それなら私が自首するわ……！ 私が本を見せて唆したのが原因だし——」

「いや、君は僕の考えに巻き込まれたただけだ。本も僕が見つけたことにするから——」

「ううん、悪いのは私よ！」

「いいや、悪いのは僕だ！」

「ふぁ～あ、まったく見ておれぬわ」

ソロモンは欠伸をして、悪魔たちを壺に戻すと、彼らに聞こえるように私に言った。

「さてミミよ、用は済んだしとっとと帰るとするか。いい加減余は腹が減ってもうた」

「え……？」

あ、そうか！ 私はソロモンの意図に気づいて、合わせた。

「そ、そうね、もうこんな時間だし。美術館に絵を返したら、マーゴおばさんの店でも寄りましょうか」

私達は話しながらその場を離れていく。

「う～、そこまで我慢できないのじゃ～！」

「しょうがないわね……じゃあ屋台の焼き栗でも買ってあげるわよ」

「ま、待ってミミ！」

セシルさんが声をかけた。

「僕らのどっちを通報する気だい？ 両方か……？」

「これは異なる事を。余とミミはこの馬車の中にあつた絵を回収しただけじゃ。そちらのことなど知らぬ。勝手に乳練り合つておれ」

「おじゃましちゃってすみません、セシルさん。それじゃあ……」

「あ……」

私達は二人を置いて、公園の出口へ向かった。

「……ソロモン……」

「ん？」

「その、ありがとう……二人を見逃してくれて。悪いことをしたとはいえ……やっぱりセシルさんが犯罪者になつてしまふのは、嫌だったから……」

個人的な感情で犯罪を見逃すのは、いけないことだとはわかっているけど……。

「ほほほ、妻の考えくらい手に取るようにわかるわ。まあお返しに、今夜はたっぷり楽しませてもらおうかのう？ あの男に取られたセシルの分もな！」

ソロモンは地団太を踏んだ。

「もう、素直に祝福してあげなさいよ」

私は苦笑した。

Belphégor ～妖女～

モナ・リザは無事ルーヴル美術館に戻された。

私達はソロモンの占い通りにモナ・リザの場所を探したら、馬車の中に置いてあったとだけ説明した。とにかく無事モナ・リザが戻ったことが喜ばしいので、それ以上は誰も追及しようとしなかった。休館中のできごとだったし、結局世間に知られることなく、この事件は収束したのだ。

.....だけど、私たちにはまだやるべきことがあった。

「え～？ なんのこと～？」

「とぼけないで。彼らに嘘を吹き込んだのは、あなたなんですよ？」

ベルフェゴールの工房で、私達は彼女を問い詰めた。

「一体何のつもりじゃ？ よもやグリモワールをばらまいておるのも、貴様ではあるまいな.....？」

「う～ん、確かにモナ・リザの由来は、他のと間違えて教えちゃったかもしれないけど～」

「あなた、それでよくここの学芸員が務まるわね.....」

「えへへ～、だってわたし人気者だし～」

彼女はへらへら笑った。その美貌で、同僚も客もだまされてるってことか.....。

「一日にお客さんは何人も来て、何回も同じ説明をするのよ～？ たまには間違えて当然じゃな～い」

「まあ、それもそうだけど.....」

「だいたい、普通その話を聞いたくらいじゃ、悪魔を呼んで盗もうとか思わないでしょ～？ ただの偶然よ偶然～」

「確かにのう。だが、貴様が知人を利用して、間接的にセシルにグリモワールのことを教えたとすればどうじゃ？」

「！」

確かにそれなら、間接的にだけ悪魔を呼ぶように仕向けることも可能かもしれない。

「でもソロモン、いくらグリモワールのことを知っても、手元になきゃ意味がないのよ。セシルさんは本屋で買ったって言ってたけど.....」

「それは、前もってこやつがその本屋にグリモワールを売りつけておいたのじゃ。その店の場所も『客』を通してセシルに伝えたのであろうな」

「.....！ な、なんて用意周到な.....。すべてあなたが仕組んだことだったのね.....！」

私はベルフェゴールを睨み付ける。ソロモンの言うことが本当なら、彼女がセシルさんに過ちを犯させたことになる。

シャックスの召喚者は、グリモワールをゴミ捨て場から拾ったって言うていたけど、意図的に誰かが見つけそうなところに置いたりして、彼女は市民にグリモワールを渡しているのかもしれない。

「どうじゃ、凶星であろう!? 貴様の悪だくみは見破ってやったぞ！」

ソロモンはベルフェゴールを指差して勝ち誇る。

「.....」

ベルフェゴールはきょとんとしたまま、黙っている。

「ほほほ、ぐうの音も出まいか！」

「.....えっと、どういうこと～？ な～んか複雑でよくわからなかったんだけど～」

ベルフェゴールはすぐに普段通りの、自堕落な笑みを浮かべた。

「え～い、鈍い奴め！ つまり、貴様がパリの民にグリモワールを渡し、悪魔を呼び出させているということじゃ！」

「わたしが～？ なんて～？ そんなことして、わたしになんの得があるわけ～？」

「そ、それはこっちが聞きたいわ！ 何を企んでおるのじゃ!? この街を悪魔に支配させるつもりか!?!」

市民に悪魔を召喚させれば、自然と街に悪魔が溢れ、パリは悪魔の手に落ちてしまうだろう。悪魔の地上への侵略。それが妥当な考えだけど.....。

ほんとにベルフェゴールが首謀者なのだろうか.....？ 表向きは頭悪そうだけど、ソロモンを復活させる装置を作ったくらいだし、どんな計画を立ててもおかしくはないんだけど.....。

「だから～、何も知らないって～。仮にそれがほんとだとしたら、わたしをどうする気～？ 警察に突き出すの～？ それとも殺すの～？」

「そ、それは……」

私は言葉に詰まる。

彼女を警察に突き出せば、彼女が原因とはいえセシルさんたちにまで捜査が及んでしまう。そうしたらもう庇いきれない。

「わたしを殺したら、ソロモンちゃんの身体や道具を修理できる人がいなくなるけど〜？」

「だ、誰も殺すなどとは言うておらぬ……！」

さすがに慌てるソロモン。

「そもそも〜、わたしが悪魔にこの街を支配させようとしたっていうけど〜。それならなんでソロモンちゃんを生き返らせちゃうわけ〜？」

「ぐ、そ、それは……」

確かにそれもおかしい。悪魔はソロモンが捕獲してってしまうので、自ら計画を潰すことになる。

「どっちかっていうとわたしはソロモンちゃんたちのお手伝いをしてると思うけど〜？」

確かに彼女がソロモンを復活させたり、その道具を修理しなければ、悪魔は野放しだっただろう。

「ま〜、どうしてもわたしが信用できないのなら、お家に連れてってもいいよ〜」

「な、なんじゃと？」

「やだ〜、ソロモンちゃんったらわたしを監禁するつもりなのね〜」

ベルフェゴールは祈るように両手を組み、恍惚とした表情で語る。

「まさか、トイレに監禁する気〜？ 首輪に鎖も付けて〜？」

そのうちよだれもたらし始める。

「うっ……ち、近寄るでない……！」

ソロモンは顔を青くして、私の背後に隠れる。

「なんかあなたが彼女を嫌がる理由がわかった気がするわ……」

あまり詳しくは聞きたくないけど……。

「ミミよ、そろそろ……」

「そうね。ベルフェゴール、あなたへの追求は、これくらいにしておくわ」

ソロモンも限界のようだし。

「うふふ、また遊びに来てね〜。この工房にはいつでも勝手に入っていいから〜。道具が壊れたら直してあげる〜」

「ええ、そのときはお願いね」

「あまり世話にはなりたくないがのう……」

「ソロモンちゃんも、いつでも『遊びに』来てね〜♪」

ベルフェゴールはソロモンに投げキッスをした。

ソロモンが全身で震え上がる振動が、背中から伝わった。

私たちは工房の階段を昇り、扉から美術館の外へ出た。ガス燈が夜の広場を照らしている。

「結局、ベルフェゴールが黒幕だったのかどうかは、なんとも言えなかったわね……」

「うむ……まあ余の知る限り、彼奴は人々に対し酷いことはせぬはずじゃ。腐ってもかつては神として崇められていた存在だからのう」

「それにしても……私の身近な人が、今度は悪魔を呼ぶほうになってしまうなんて……」

一度知人全員に、グリモワールのことを聞いて回る必要があるだろう。

「それに、あの男はイタリア人とか言うておったな。どうやら悪魔を呼ぶのには、フランス人である必要はないということかの？」

「あ、そっか。そうなるわよね……」

要はフランス語で書かれたあのグリモワールを読めればいいらしい。

いずれにしても、悪魔の事件はますます広がるばかりだ。

「なんとかして街中のグリモワールを、全部回収できればいいんだけど……。本屋にあるものなんて、とっくに誰かの手に渡っているでしょうね」

「うむ、持っておる者は誰にも言わぬであろうし、新たに何物かがばらまくやも知れぬ」

ソロモンは私に向き合い、微笑んだ。

「まあ任せておれ。本を回収できぬのなら、悪魔を回収すればよいだけのことじゃ。幸い余の配下の者しか呼ばれないようじゃからの。全てこの壺に収めれば、万事解決じゃ。ほほほ」

「確かに、それもそうね」

私も微笑み返した。

まだまだ先は長そうだけど、彼女がいればなんとかなりそうな気がする。

ソロモンが来てから、私の生活は一変した。本を読んで過ごすだけの平和で退屈な日常は終わりを告げ、危険と隣り合わせの忙しい日々が始まった。なんで私がこんな大変なことをしなきゃいけないのか、疑問に思ったりもする。だけど不思議なことに、こんな毎日悪くない……とも思えるのだ。

それはやっぱり——いつも隣に、この子がいてくれるからかもしれない。

奥付

製作・著作 よもぎ史歌

ご意見・ご感想は下記までお願いします。

moondiana★hotmail.co.jp（★を@に変えてください）

Pixiv

<http://www.pixiv.net/member.php?id=1116253>

Twitter

http://twitter.com/#!/yomogi_fumika